

東北学院大学教職員修養会 キリスト者教員研修会 報告書

第 17 号



沖へ向かって (ルカ5:4)

巻頭言

2015 年度	第 60 回教職員修養会	1
2015 年度	第 20 回キリスト者教員研修会報告	43
2015 年度	第 41 回サマー・カレッジ報告	47
2015 年度	第 38 回青山学院大学・東北学院大学合同チャプレン会議報告	65
2015 年度	宗教活動報告	71

東北学院大学

「神の国を見る」(ヨハネによる福音書第3章1～5節)

ヨハネによる福音書第3章には、主イエス・キリストが、ニコデモというユダヤの議員の一人と会話をする様子が描かれています。その中で、主イエスは、人は「新たに生まれなければ神の国を見ることができない」(3節)とされました。この言葉は、言い換えれば、「人は、新たに生まれれば、神の国を見るができる」ということを意味します。「新たに生まれる」、つまり「新生」ということと、「神の国を見る」ということが直結しています。「新生」とは、この会話の中で、主イエスが「水と霊とによって生まれる」(5節)ことであると説明されていますが、端的に言えば、神への信仰をもって生きるということです。神を信じて生きる、つまり信仰者として生きる神の国が見えてくると言われています。

そこで「神の国」とは何でしょうか。それは、神への信仰を抱くことによって見えてくる神の大いなる働きであり、歴史であり、さらに人間に対する慈しみと憐れみであり、また私たちが祈りと感謝と献身によって神に応答する世界です。それは遠くにあるのではなく、未来にあるだけではなく、「今、ここにある」世界です。少なくとも、「人は、新たに生まれれば、神の国を見るができる」からです。これと共に聖書で言われていることは、神の国は神の許にある完成された世界であるということです。神の国だからです。つまり、神の国とは、私たちの世界にすでに登場しつつ、同時に未来にある世界と言えます。

信仰をもって神の国を見るときは、もう少し具体的に言えば、私たちの世界をどのように見つめることになるのでしょうか。この問いに対しては、すでにこの世界に生きた多くの信仰者の証言から明らかになります。その一つ一つには測り知れないほど多くの献身と貢献、犠牲と博愛が満ちています。その背後には、祈りと讃美、感謝と喜びがあり、人から報われなくても、忘れられても、神に知られているという一点で、確かな手ごたえと揺るぎない強さを秘めています。

翻って、本学の歴史を振り返りますと、そこには神の国を見た人々の証があります。東北学院は、聖書に基づくキリスト教の精神によって教育する学校として、三人の熱心な信仰者によって建てられました。押川方義とウイリアム・ホーイ、そしてD. B. シュネーダーの、今

日三校祖と呼ばれる先生たちです。この先生方の傍らには、さらにその働きに賛同する国内外の多くの支援者がいて様々な形で本学の発展に寄与されました。今では東北学院の維持と発展のために尽くされた人々の名前やその数は数えきれません。それは実際、数えることができない性格のものでもあります。

東北学院は、1886年に創設された仙台神学校から始まって、今年130年を迎えました。さらに私たちは「TG グランドビジョン150」において具体的に前進していく目標を立てています。確かに学生数や財源といった存続のために必要な数値は常に求められ、十分な土地や整った施設が必要なことは言うまでもありません。地上の国における施設の建設は具体的な条件が求められます。しかし、私たちの出発は、「志」から始まったことを見落としてはなりません。その「志」が具体的に必要なものを生み出し、受領し、発展を遂げてきたという歴史を持ちます。その「志」とは、神への信仰をもった人々の、「今、ここに」神の働きを見た、心の内にあったと言えます。その「志」とは、これからも私たちが確かに保持し、そこに常に立ち返るべき「神の志」であるとも言えます。

「神の国を見る」とは、「神の国」であるからこそ、神が先頭に立って働いてくださり、導いて下さる国です。その国を信仰をもって見つめることが必要です。その国の建設のために私たちは、神の働き手として、神の道具として、神の国の建設に参加する一人でもあります。地上の国という視点に、さらに「神の国」という、今あって未来にある国を心に刻んで、私たちの教育と研究をさらに豊かに発展させる努力を続けていきたいと願います。

2015 年度
第 60 回教職員修養会報告

第 60 回東北学院大学教職員修養会プログラム

期 日 2015 年 9 月 3 日 (木) ~ 9 月 4 日 (金) 1 泊 2 日
会 場 宮城蔵王ロイヤルホテル (TEL 0224-34-3600)
〒 989-0916 宮城県刈田郡蔵王町遠刈田温泉字鬼石原 1-1

主 題 『聖書に聴く』
講演題 『キリスト教大学の使命と可能性』
講 師 東京神学大学名誉教授 (前学長)
近藤勝彦先生

9 月 3 日 (火)

9:00 土樋キャンパス正門前より送迎バス出発
10:00 受 付
10:30 開会礼拝
学長挨拶
講師紹介
11:00 講師講演
12:00 質疑応答
12:25 オリエンテーション
12:30 昼 食
13:30 各部屋チェックイン
14:00 グループ懇談『講師講演をめぐって』
15:00 休 憩
15:30 全体懇談「映像で観る『東北学院の 100 年』
— 創立 130 周年を控えて—」
東北学院史資料センター調査研究員 日野哲氏
18:00 夕 食
19:30 自由懇談

9 月 4 日 (水)

7:00 朝 食
チェックアウト
9:00 朝 拝
10:00 全体協議・報告会
12:00 閉会礼拝
閉会挨拶
12:30 昼 食
13:30 解散 (ホテル前より送迎バス出発)
14:30 土樋キャンパス正門到着

第 60 回東北学院学院大学教職員修養会開会礼拝奨励

【開会礼拝】

司会 野村信宗教部長

讃美歌：348 番

聖書：旧約聖書 イザヤ書 第 2 章 2 節～5 節

新約聖書 エフェソの信徒への手紙 第 2 章 14 節～22 節

説教：『キリストの平和』

説教 松本宣郎学長

讃美歌：531 番

「イザヤ書 第 2 章 2 節～5 節」

終わりの日に

主の神殿の山は、山々の頭として堅く立ち、どの峰よりも高くそびえる。

国々はこそって大河のようにそこに向かい、多くの民が来て言う。

「主の山に登り、ヤコスの神の家に行こう。主はわたしたちに道を示される。

わたしたちはその道を歩もう」と。

主の教えはシオンから 御言葉はエルサレムから出る。

主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。

彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。

国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない。

ヤコスの家よ、主の光の中を歩もう。

「エフェソの信徒への手紙 第 2 章 14 節～22 節」

実に、キリストはわたしたちの平和であります。二つのものを一つにし、御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し、規則と戒律すくめの律法を廃棄されました。こうしてキリストは、双方を御自分において一人の新しい人に造り上げて平和を実現し、十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされました。キリストはおいでになり、遠く離れているあなたがたにも、また、近くにいる人々にも、平和の福音を告げ知らせられました。それで、このキリストによってわたしたち両方の者が一つの霊に結ばれて、御父に近づくことができるのです。従って、あなたがたはもはや、外国人でも寄留者でもなく、聖なる民に属する者、神の家族であり、使徒や預言者という土台の上に建てられています。そのかなめ石はキリスト・イエス御自身であり、キリストにおいて、この建物全体は組み合わされて成長し、主における聖なる神殿となります。キリストにおいて、あなたがたも共に建てられ、霊の働きによって神の住まいとなるのです。

『キリストの平和』

学長 松本 宣郎

今年も恒例の大学の教職員の修養会の時が巡ってまいりました。リトリート、引き退いて、しばしの間、想いを一つにして学院のこと、また学院がよって立つキリストについて考え、あるいは話し合う時が与えられたことを大変うれしく思っています。開会の礼拝を担当する大変大事な務めを与えられておりますことを改めて感謝し、共に聖書に耳を傾けたいと思います。

毎年日本では8月になると、平和ということのを否応なく強く意識し、思い起こします。今年は特にそのことを考えさせられ、それもかなりの不安の念を持って考えさせられている、そういう状況に私達はあるのだと思います。今日は旧約聖書のイザヤと新約聖書のパウロの言葉が与えられました。救い主のことを預言した、しかしそのことを目の当たりにできなかったイザヤの平和にかかわる言葉と、キリストを知りキリストの復活を信じ、知って理解したパウロの言葉の対比の中で、平和の持つ意味を私なりに考えてみたことをお話ししたいと思います。

まず、イザヤ書であります。彼は紀元前700年頃のイスラエルの預言者であります。ですからイエスが現れる700年～800年前の人であります。苦難の中で、いつ滅びるかわからないイスラエル・ユダヤの国に必ず救い主は来るということを確認し、預言した人です。その預言の中のこの言葉は、まさにその時がきたらこうなると語っている一節だと思えます。2章の4節に「彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする」、つまり彼が生きていた国が近辺の強国の脅威にさらされて襲われ、あるいはイスラエルそのものが戦いを挑むということもあった歴史の繰り返しの中で、イザヤはこのような戦いの中で、しかし戦いが止む時が来ると語るわけです。その時には、これまで人と戦いあるいは人を殺していた武器がその目的を果たす必要がなくなる、だから刀は土を耕す鋤、槍は草を刈る、あるいは小麦を刈る鎌にしていいいのだという、大変印象的な言葉です。平和という言葉こそありませんけれども戦いの必要がなくなる、平和だ、このことを詩人である預言者は語っているわけです。

人類の歴史の中でおそらく最初にあったことの一つが争いだと思えます。戦いだと思えます。それは数十人規模の小さな群れと他の群れとの戦いであれ、あったと思えます。略奪であり殺戮があったと思えます。しかしそれが止む時もあったと思えます。ですから人類の歴

史の最初からあった戦い、その戦いのない状態が、その言葉はまだなかったかもしれませんが平和でありました。ギリシャ語にもラテン語にもローマ字の言葉にもそしてもちろん聖書の言葉の中にもエイレーネーであるとかパクスであるとかシャロームであるとかそういう言葉は古くからあるわけであります。特にこのイザヤの言葉は非常に有名でよく使われます。やはり人類が歴史の中でどの時代を通じても平和がありがたいということはわかりきっていたわけです、しかし戦争は起こる。そんな中で語られる言葉であり続けたと思います。

この言葉に関して、この夏から秋口にかけてこのことと偶然一致する出来事がありました。今は福岡に移動しているようですが、大英博物館展というのが東京を始めとして開かれています。ウルスタンダードという昔のメソポタミアの都市国家の祭礼らしい様子をきれいなラピスラズリの青を地にして、人間や動物などで描いた大英博物館のお宝の一つが来ていたりします。その展示物の中の一つに、ある像があります。あまり大きくないようですが、この像は何かというはずいぶん新しいもので、アフリカのモザンビークというご存知の方がいるだろうと思いますが、激しい内乱が1976年から15年程続きまして何十万という人たちが殺戮されるようなことが起こっていました。しかしその無残な紛争も1992年に終結をみて、まさに争いが終わりました。モザンビークの子供たちは平和を確信することができました。それ以後他の国ではまだ激しい内乱やら争いが続きますが、モザンビークでは比較的落ち着いた状態が続いているようであります。そのモザンビークでは内乱のさ中、巨大な先進国から、武器がものすごい量で流入していたわけですが、戦争が終わってその武器を没収する、集めるということをやったようであります。これがなかなかできないのが先進国ではありますが、武器を集めて破棄していったということなのです。破棄した武器を使えなくするための作業、これは大変な作業だったと思うんですけどもどんどん壊していきました。カッターで、銃やミサイルそういったものを切り裂くそんな作業をしました。その壊した武器で造ったのがこの彫刻です。「母」という題名の彫刻で、なんと申しますか、ロボットの的な感じではあるんですけども、骨組みだけで出来たような。しかし銃の台座の木の部分がありライフルの銃口の部分があり、あるいは引き金の部分があって、それが組み合わされて女性の像になっている。しかしこの女性が手に持っているハンドバッグ、あるいは袋は銃で出来ているわけではないようですが、そういう像であります。ジャコメッティという有名な彫刻家がいるのをご存じかと思いますが、この人の彫刻にちょっと似ています。針金とか、鉄骨とか、ぎりぎりまで人間の像をデフォルメしたそういう像にちょっと似てるんですけど。要するにこれはまさにイザヤの言葉のような気がします。武器はいらない、平和がきた。いらない武器は別の役に用立てるということであります。平和はこの世に戦いのない状態を指して用いられる、そのこと自体はそのとおりだろうと思いますし、そのような平和はもちろん望ましい訳であります。

戦争の多い人類の歴史であります。しかし何度となく戦争が起こり、平和がほしいと言って平和がようやく実現する、しかしそれがまた破られる。ということが人類の歴史の中では繰り返されてきました。そんな中で戦争に加わった人たちから平和が必要なんだということもまたよく語られるわけであります。ところが戦争が起こった時はこうしようと準備しておかなければならないから、その時のための法律が今現在日本では審議されているわけであります。それは平和のための法律だと言うのですが、国民の安全と平和のために、戦争がいつでもできるような準備をして保障される平和だということになるろうかと思います。極めて限定的であります。モザンビークのように今ある武器を全部鋤に換え、今風に言うとパソコンの器具に換えという発想は起こってこないのであります。

古代ローマの歴史の中で思い浮かぶ話があります。紀元一世紀ローマの勢力が今のイギリス、ブリテン島に進出していきます。現地にはケルト系の人たちがおりましてローマの勢力と軍事力に激しく抵抗します。ブーディカなどという女王が戦いました。この女王が反乱に立ち上った理由は彼女の娘たちがローマの兵士によって凌辱されたという、そういう出来事がきっかけにもなっていたわけですが、燎原の火のようにブリトン人たちの反乱が広がり、これを制圧するローマ軍との凄惨な戦いが展開されたわけです。そんな中でローマはいくつものブリトン人の街を、焼き尽くしていきました。逆にローマ軍の兵站、軍営地にブリトン人たちが戦いを仕掛ける、そのようなことが繰り返されます。徐々に徐々にローマの支配領域が増えていきます。住民を虐殺しあるいは追い出し、あるいは捕えて捕虜にしてそこはともかく戦争のない状態になると、こういう状態の地域がだんだんと増えていきます。そんな中でブリトン人の反乱の首謀者、首領のひとりであったカルガクスという人が、ローマ人との戦いを最後までやろう、と仲間に訴えた演説を、面白いことに、ローマ人の歴史家タキトゥスが記録しています。その演説のなかでカルガクスは「彼らローマ人は破壊と殺戮と略奪を偽って支配と呼び、荒涼たる世界を創り上げた時それをごまかして平和と名付ける」と語る、有名な箇所です。これはタキトゥスが書いたアグリコラという人の伝記の一節であります。ある意味残酷な平和です。力があっての平和という概念がローマの場合にも表れていたことがわかります。このような平和がわたくしは人類の罪あるいは人類のどうしようもない限界だというふうに思います。先程ちょっと言いましたが、とにかく平和が歴史上求められはすると、しかしそれはもろくも破られるということの繰り返しが一つと、それから平和とはいえその平和を確立したのは力であって、その平和確立の過程で抹殺されていった弱い人たちが無数にいたと、そこにあるのが人間のどうしようもない現実であった、そうである以上このような平和はこれからも生れはするでしょうけれども実に危うい平和、あるいは偽りの平和ということになる。それしかないのではないか、少なくとも人間の平和である限りはそのように思います。

さて、パウロの言葉であります。パウロという人自体が最初はナザレのイエス・キリストの宣教に反発し、彼を神の子と信じるキリスト教徒たちに戦いを挑んだ人であったということは象徴的です。しかしその後、彼は幻のキリストと出会うという劇的な体験をして、キリストの教えを述べ伝える大伝道者となったわけであります。そして彼はたくさんの教会を建て、あるいは強め、多くの教会を励ます手紙を書いた。新約聖書の半分はパウロの名を冠する手紙です。その中にはパウロという名前がついているだけで後から別の人が書いた手紙もありはするようではありますが、そのような大きな存在であったパウロが、やはりしばしば語るのが平和であります。しかしキリストを一度は否定し、しかし逆にある意味でキリストに圧倒され、あるいは自らの存在を否定されて死んで生まれ変わったといてよいパウロは、キリストこそ平和である、今日のエフェソの箇所にもそうありますが、そう断言する者となったわけであります。

パウロが言う平和はどういう意味であるのか、彼はそれがキリストなのだというわけであります。キリストがおいでになり、神の言葉を述べ伝えられ、しかし十字架で処刑されて三日目に蘇った、このことを受け入れる、信じる群れがキリスト教徒であります。パウロもそれを受け入れたわけです。最初は十字架で死んだ者を神の子だなどと言いふらす者はけしからんと迫害する立場にあったパウロがそれを受け入れたわけであります。そのパウロが言う平和であります。これは読めば分かるように単に戦争がない状態というあやふやな平和、先程述べてきた、大事ではあるけれども大変もろい平和とは違う平和である。それは、キリストそのものが平和だと言ってもいいのです。パウロは、キリストがおいでになったことによって戒律はなくなった、敵対する者の間の差別の壁もなくなった、どこにあるかと、霊によって結ばれて一つになって人間は神に近づくことができる、もはや外国人も寄留者も区別はない、すべて神の民、聖徒としてひとつ足りうるのだ、これはキリストのおかげである、そうパウロは言うわけです。それが平和だ、と。隔ての壁が取り壊されるわけですから戦争をすることはなくなるという含意はあります。しかしその最初にパウロはキリストのおかげである、キリストが来られたからであるということをもまず付け加えるわけです。とても大事なキリスト理解をパウロは打ち出して、たぶんペトロとかイエスの直接の弟子たちとかが思い至らなかった深みまで彼はキリストを理解したのだと思いますし、彼のキリスト理解のちのキリスト教の土台となっていくことは間違いないのですが、その一つがキリストをこのように平和と捉える、人と人との中垣を、壁を取り除く、人類を一つにする、もちろんキリストを受け入れる信仰ということが前提になるわけですが、その理解を示したということはパウロの非常に大きな功績でしたし、それはパウロをとおして神が人類に教えられたことだと思えます。

そのキリストが平和だということの根拠、パウロはここでは述べていませんが、そこには

イエスの十字架の死と復活ということがあると思います。十字架に架けられる前にキリストは裁判にかかります。それまでキリストは、暴力的な行為はしないけれども、人々に悔い改めを迫るということをして、ユダヤの神に固執し、律法に固執し、救い主がくるということには分かっているけれども、キリストが救い主だということは一切認めない、そういう勢力に対する激しい批判をしました。そのことがあって彼は捕えられ、ローマの権力に引き渡されましたが、これも象徴的なことです。ユダヤに来てローマの権力は、ユダヤの人々を押さえつけてこれが平和だと語ったのだと思いますが、ともかくローマの総督の手に委ねられてキリストは死刑を宣言された。そして彼は殺されたわけです。しかし、復活した。神の力によって。これがあるから本当の平和がキリストなんだ、とパウロが言えたのだと思います。大きな犠牲、果てしもなく大きな犠牲がキリストの死であった。しかし彼は復活した。これが平和だ。そうである以上、人類はこのキリストによって、平和になり得るのだと、ひとつになり得るのだと、という保証が与えられた。ここにはさらにまた、この平和というのは本当に大きな長いものであり、且つ究極的な神の国を先取りするものであって、今この世を生きている私たちは死んでも本当には死なない、この究極の平和へとつながる、永遠の命を生きるというところまで、私たちの平和理解は発展しつながっていくわけであります。少し大袈裟なことを言ったかもしれませんが。キリストを受け入れるということの難しさということもあるかもしれません。しかし、現実のあまりにも脆い平和、何か薄いベールを被っているだけの平和にしか出会わない私たちにとって、ここにキリストの死と復活に本当の平和がある。そうである以上この地上にも薄いベールがやがて厚い絨毯となって、先程の武器ではないですけれども、現実にもそういうことも起こって、武器はいらない、武器を使って平和の芸術作品を作るといふ、そういうことを私たちもまた、可能性として、いや確信として希望として与えられているのだ、その希望の中に私たちも生き、東北学院も生きている。そう確信をもっていきたい、感謝していきたい、そのように思います。

お祈りをいたします。

神様、今年の東北学院大学教職員の修養会を豊かなめぐみから始めさせていただき、ありがとうございます。どうぞ上辺だけでない、不安でない本当の平和を私たちに与えてください。平和の確信をもって私たちが世に生き、またそのメッセージを、個人を通じて、あるいは学校を通じて発信していくことができますように。この願いと感謝を主の尊いみ名によって御前にお捧げいたします。アーメン

主題講演「聖書に聴く」

「キリスト教大学の使命と可能性」

東京神学大学名誉教授 近藤勝彦 先生

講師略歴

近藤 勝彦

(こんどう・かつひこ)

東京神学大学名誉教授

銀座教会協力牧師、日本キリスト教文化協会理事長、国際基督教大学理事

1943年10月12日 東京生まれ

学歴

東京大学文学部哲学科卒業

東京神学大学卒業、同大学院修士課程修了

チュービンゲン大学留学

学位

神学博士（チュービンゲン大学）

名誉博士（神学）（東京神学大学）

職歴、兼職

日本基督教団小岩教会牧師（1970年－1973年）

東京神学大学専任講師、助教授、教授（1978年－2013年）

同大学学長（2009年－2013年）

その間、日本基督教団ベテル教会牧師、聖学院大学特任教授を兼務

著書

『トレルチ研究上・下』（教文館、1996年）、

『デモクラシーの神学思想』（教文館、2000年）、

『伝道の神学』（教文館、2002年）、

『啓示と三位一体』（教文館、2007年）、

『キリスト教の世界政策』（教文館、2007年）、

『キリスト教倫理学』（教文館、2009年）、

『贖罪論とその周辺』（教文館、2014年）、

『人を生かす神の息』（教文館、2014年）、

その他。

主題講演「聖書に聴く」 「キリスト教大学の使命と可能性」

東京神学大学名誉教授（前学長）

近藤 勝彦

ご丁寧なご紹介をいただきました近藤勝彦と申します。よろしくお願いたします。

今日は東北学院大学の教職員修養会にお招きをいただき、感謝を申し上げます。ただいま開会礼拝にあずかって、礼拝説教を学長自らがなされましたが、キリスト教大学の中でも必ずしも、すべてのキリスト教大学でそうできるわけではありませんので、これは東北学院の幸いな現実と申し上げなければならないと思います。そういう感銘を与えられました。この修養会は、聖書の学びが重要なテーマであると伺っております。それで、聖書の箇所にも触れてお話しをさせていただきたいと思いますが、大学の教職員修養会ですので、「キリスト教大学の使命と可能性」という題を掲げさせていただきました。この題について考えながら、その関連で念頭に浮かびます聖書の箇所を2、3挙げて、聖書の学びにも集中するという方で過ごさせていただければと思います。

今日の大学の使命を考えますと、どの大学でも外せないことは、現代の社会が高度技術社会、しかもグローバルな高度技術社会として、避けがたい運命の中に置かれていることではないかと思えます。高度技術は特定地域に限定されず、技術それ自体がグローバル化の推進力になります。ある地域で高度な技術が開発されれば、それは直ちにグローバル化します。そういう勢いを持つものです。文科省の教育行政の中では、この高度技術化を促進し、競争社会に打ち勝つ教育を推進することが強調されていることが明らかです。それに併せてグローバル人材の養成を求めて、全国の大学にアピールして、20か30か、グローバル人材育成のための特別大学にして、かなりの給付金を出すことが行われています。高度技術化には先端的な専門性が必要なわけで、専門的研究とその技術的な適用と促進を求めるわけです。ですが、同時に高度技術化は、その成果によって膨大な大衆化を引き起こします。現代は、従って高度技術社会ですが、それはまた多面、極めて膨大な大衆消費者社会になっています。そして技術社会を牽引する専門家と大衆の間には乗り越えがたい格差が生じています。

今日の大学教育を考える時、取り組まなければならない技術化あるいは専門化があります。

学問研究は、工学的なテクノロジーに関係する学問でなくとも専門性を要求し、専門分化を推進します。それが学問の宿命になっています。大学教育に際して、その専門に特化してそこに深まっていく面と、他面グローバル化や大衆化から起こってくる諸問題にどう対処するか、それら両方の傾向の中で、現代の大学はいろいろな問題に直面しています。キリスト教大学は特にその中でどう歩むべきか問われています。

そこで大学の状況を敢えて端的に凝縮して申しますと、大学だけでなく初等教育、中等教育も含めて、教育全体が、一方で専門性の追求を求められながら、他方、日本の教育の現場では中等教育における道德教育の不可欠性が主張されます。大衆化現象の中で、道德教育をどうしたらよいか、道徳的に人間を立てることが教育上極めて肝要なこと意識されているわけです。大学で求められる専門性と、大衆社会に必要な道德教育の再建、この両者に今日の教育問題の特徴がよく表れているのではないのでしょうか。

技術化とか専門性の追究ということは、どんなに高度にわたっても、精神的価値とは別なところがあります。学問が専門性に深まるとしても、それで直ちに精神的価値と結合するわけではないでしょう。技術について考えますと、技術そのものは常に手段に関わって、目的や意味に関係するわけではありません。iPS細胞に関する生命科学がどんなに進歩しても、それで生きる意味がわかったという話にはなりませんし、人生の目的に対して回答が出たというわけではないでしょう。原子力に携わる科学技術がどんなに進んでも社会の進むべき進路や目標がそれでわかるわけではないのと同じです。技術は価値論的には無規範です。生命の尊重というようなことも、技術からは根拠づけられないと思われまます。

エーリヒ・フロムという社会心理学者は、技術は元来ネクロフィラスなものだと言いました。ネクロスは死や死体のこと、Dead body です。フィレオーは、愛好する、愛する、好む、ということですから、ネクロフィラスは命なきものを愛好することを意味します。例えば、技術は自動車のような乗り物を生み出しましたが、車に乗っているのと馬に乗るのではかなりの違いでしょう。技術そのものにはネクロフィラスな面があるということは、別の表現で言えば、アンモラルティの面があるということでしょう。「規範喪失社会」という言葉がありますが、技術の発達によって様々な時代の激動が起こり、その中で共同体の変貌も起こります。道徳的には基盤が非常に弱くなります。少々話が単純化しすぎるかもしれませんが、技術化が推進すると、社会変動の中で道徳的基盤が動揺し、行き着くところまでいきますと、無規範的な社会、規範喪失社会に近づいていきます。もうすでに100年以上前に、フランスの社会学者デュルケームが『自殺論』を書いた時、その中に「アノミーのための自殺」が起こると言っています。100年以上も前にそう気づいた炯眼に感心するのですが、規範が揺らいでくると、人間の欲望は制御できなくなる、というのが彼のアノミー的自殺の説明でした。それは技術化社会が持っているひとつの問題として、道徳についての緩みをどう制御し、そ

れに耐えて人生と社会を支える基盤を持続的に保持できるかという問題が起きてきたわけでしょう。

話が少し飛びますが、今年の6月文科省が全国86の国立大学に通達を出したということです。日本は国立大学に行くことによって、私立大学も誘導しようとする傾向を持っています。国立大学への通達というのは、教員養成系や人文・社会科学系は組織の廃止や社会的要請の高い分野に転換することを求めるという内容であったと新聞報道にありました。社会的要請の高い分野とは、つまり大学にも市場原理を働かせるということでしょう。文科省のその通達には、国益のための成果が問われているわけです。国益的な成果主義というものがあります。市場原理の場合も、国益に対する成果主義の場合も、さらにはグローバル化の推進にしても、大学を強化するのに数値化がなされます。数値目標が立てられる分野と、立てられない分野があるのですが、どんな分野も数値目標を立てないとならない。それが現代の教育行政によって大学が置かれている位置です。人文系の例えば哲学などをやっている人達はどのようにして数値化されるのかと思うのですが、論文の数の話になるのか、詳しいことはわかりません。

市場原理や国益成果主義、そしてグローバル化についても数値目標を立てて評価するという線でいきますと、要するに研究と教育の専門性をめぐって、大学の哲学離れは進み、「哲学なき大学」という話になるのではないかと思います。心配なことは、この線でいくと、大学は非精神化されます。そうならなければよいと思いますが、あるいはもうやり始めているのではないかと危惧されるわけです。

日本の教育行政は先程言いましたように、国立大学に指示を与えることを通して全体の教育を誘導しますから、私立大学も影響を受けざるを得なくなっています。助成金の問題もあり、研究助成金や大学全体がグローバル人材養成の基準に合っているかどうかで助成するなどの方法を通して、文部行政が推進され、その方針がじわじわと浸透していくという具合です。

大学の非精神化が、大学の哲学離れ、さらに言えば大学の非精神化として実現していくと、教育の中ではどういうことになるのでしょうか。一方で中等教育においては道德教育を強化しなければならない。大衆化社会の中で道德教育の強化は避けられず、この面での教育は重大な問題になっています。しかし同時に大学での教員養成系あるいは人文・社会科学系に対しては、市場原理を用いて、あるいは国益成果主義によって、数値目標というようなことによって、廃止をしたり、改編を求めることになります。どうもちぐはぐなことをやっているように見えます。文科省は大学の高等教育局と中等教育局でちぐはぐなことをやってはいないか、そうでなければ道德教育は大学の専門性とはあまり関係がないのでしょうか。大学の専門性は技術化傾向へと傾斜させながら、中等教育は道德教育が重要という、この両方

が矛盾しないと考えているという話になります。これが今日、私がここに立ったときのキリスト教大学が置かれている、あるいはキリスト教大学のみならず、日本の大学全体が置かれている一種の教育と研究の状況ではないかと思われるわけです。

それで思い起こすのは、マックス・ヴェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の巻末で語ったあの「最後の人間たち」についての言葉です。ヴェーバーは、禁欲について、当初の禁欲は禁欲的プロテスタンティズムの宗教性に裏打ちされた禁欲でしたが、それが近代経済というものに大きな刺激を与えて、伝統主義的な精神から新しい近代的な精神へと転換し、経済の推進力になったと語ったわけです。あれは歴史についてそう言ったわけで、ヴェーバー自身の時代についてはそう言ってはいませんでした。ヴェーバーはキリスト教を真っ向から信じていたわけではありませんから、ヴェーバー自身が目の前に見ていたのはむしろ「鉄の檻」、つまりもうがんじがらめで禁欲的であらざるを得ない経済状態です。朝早くから満員電車で揺られてでも、とにかく勤勉に働かなければならない、そうでなければ社会でもたない、あるいは勤勉に働かなければ競争に負ける。ですから、もはや禁欲は「鉄の檻」と化した社会の中では宿命になっています。それが彼の持っていた時代認識ですね。そういう禁欲の宿命の中に陥って「最後の人間」はどうなるのかと言った時、ニーチェの『ツァラトゥストラはかく語った』に出てくる言葉を引用したわけです。

「最後の人間」という括弧つきで書かれた文章は、ツァラトゥストラの序説第5節に出てきます。つまりニーチェが超人の到来を考えた時、他方には少々言葉が乱暴ですが、愚鈍な畜群としての人間たちがいて、自己満足の中に落ち込んだ人間のことが言われているわけです。詳しい定義はあそこでは欠けていまいが、それをヴェーバーは引用し、ただしその内容はヴェーバー独自の社会経済史的な見方を入れて、今申しました宿命と化した禁欲の檻、その中で「最後の人間」はどうなるかと語ったわけです。それが「精神なき専門人」そして「心なき享楽人」という有名な表現になりました。

最近の文科省のいう教育行政は、精神なき大学、あるいは大学と道徳の分離、あるいは心を失った文化や享楽とでも言えるわけで、文科省の教育行政は100年前のヴェーバーの洞察を地で行くようなものではないか。そのように6月のあの通達のニュースを新聞で読んで感じました。ちょうど東北学院大学でどんな話をしようかと考えていた時に、その新聞を読んだので、今日の大学問題の背景としてこれに触れておきたいと思ったのです。そこからさらに大学の使命という問題を考え、その中で特にキリスト教大学の使命とその可能性を考えると、何が問題になるかです。大学の使命は今日特に＜専門性＞というものを追究し、それを深め、それを教育することが不可欠ですが、しかしそれを支えそれを方向づける＜精神性＞がやはり不可欠であり、その両者の統合を図ることが求められているのではないかと思うのです。「専門性」と「精神性」の「統合」が大学においてなされる必要がある、そう思っています。

そうでなければ何も大学をやることはないという話になるのではないのでしょうか。「精神なき専門性」であるのならば、なにも大学での研究でなくてよいのです。

技術・テクノロジーと大学の関係は一考に値するテーマでしょう。それで付け加えさせていただくと、工学部は元来、古くからの大学にはなかったものです。今でも、“Institute of Technology”という言い方が、マサチューセッツ工科大学(MIT)など、なされています。ドイツで言えば、“Technische Hochschule”で、その有名な場所がいくつかあるようです。つまり“University”と区別されています。日本の大学では、東京帝国大学を造った時、ベルリンのフンボルト大学に範をとりました。憲法がプロイセン憲法に範をとったように、大学形成も、きわめてドイツ的でした。ですからベルリン大学から学んだのですが、ベルリン大学と違ったところが二つありました。ひとつはベルリン大学にはない工学部を日本の帝国大学に取り入れたこと、それからベルリン大学では中心にあった神学部をはずしたことです。だから大学は神学部を持たずに工学部を入れるというのが、日本の明治に始まった大学の基本的なスタンスになったわけです。「精神なき大学」の傾向は最初からのものです。

私は大学の中に工学部を入れたことは結果的には良かったと思います。それは悪くない。なぜかというと、テクノロジー問題を、大学の中で非常に重大とされる精神性、すなわち人文系や社会科学系と共に扱う。特にそれは人文系ということになるでしょうが、それとの統合を図るということにむしろ現代文明の重大な課題があると言えるからです。それで、大学の使命として専門性と精神性、その統合について模索するということが重要なテーマになります。教育において専門教育をもちろん行うわけです。ですが同時にその専門を持ってどう生きるか、あるいは専門的な研究や技量、その技量がどんな意味を持つのか、そしてどんな人生にそれは用いられるか、そういうことについても大学は若い世代に伝えていくことが重要な課題ではないのでしょうか。ですから話は非常に単純ですが、大学の使命として専門的な研究と教育というものと、精神性を深めるということの統合を図ることが大学教育として重大な使命であるということです。

キリスト教大学はこの点についてどう考えるかと言った時、私はこの問題についてキリスト教大学は戦略的に極めて優位な地点に立っているという認識でいます。キリスト教大学は今の教育状態の中で言うべき言葉を持っていると言ってよいのですが、それはキリスト教大学の使命に合致していると思うわけです。

キリスト教大学における専門性と精神性の統合についてもう少しお話をしたいと思います。この問題は、キリスト教大学の根本に遡りますと、いろいろな大学のスローガン、標語の中に表現されている言い方で言えば“Pietas et Scientia”になるでしょう。これはよく大学の建物などに掲げられています。東北学院大学の建物の中にそれが書かれているかどうか存じませんが、最近、東神大と韓国の長老会神学大学との協力関係を結ぶことがあって、出かける

ときがあったのですが、その大学の中の礼拝堂に、“Pietas et Scientia”と掲げられてあり、ここでもこれを標語にしていると知りました。それは神学を中心にした大学で、他に教育学部などを併設していますが、その標語が身近だったのでしょう。“Pietas et Scientia”つまり“敬虔と知識”です。“pietas”は“piety”ですね。そして“Scientia”は“science”です。ですから「敬虔と学問」、あるいは「信仰と科学」、そういう仕方で大学のスローガンにしているわけです。これは他のいくつかの大学に見られるでしょう。“pietas”、敬虔、あるいは信仰と、“science”、学問、科学、それは科学の専門性ということですが、それを“et”“and”で結びつけています。並列させています。あるいはそこに区別があります。信仰と科学の区別がありますが、大学の中でその両者を立てているというのは、そこに統合を図るわけです。統合を目指しています。それは piety の真理と science の真理、それらが統合されるどころ、区別されながら統合されるところがあるということ荷が基づいて大学があるということです。“science”の中で専門性を追究するとき、“science”のなかに“technology”も入れて考えられるでしょう。“Pietas et Scientia”ということはウェーバーの言葉でいえば“Geist und Fach”です。“Fachmensch”ということで、専門人を養成しながら、しかし“Pietas”信仰と敬虔を教えるという、そういう“Piety”を教えることが表現されていると思うわけです。

その場合に「真理概念」が重要で、これを今日の聖書の学びで後程、付け加えたいと思います。「信仰の真理」と「知識や科学の真理」、その統合は真理の理解に基づきます。信仰の真理というものと科学の真理には違いもありますけれど、信仰の真理は信頼の対象であって、これは概念としては聖書的あるいは新旧約聖書、イスラエ尔的なものが含まれます。それと学問的・科学的な真理ですが、その区別と統合ということを考えることが、キリスト教大学の一つの重要な意味であって、それによって精神性と専門性の統合という大学の一般的課題にキリスト教大学として挑戦的に回答してことができるのではないかと思うのです。

この問題は、ひところは科学や学問は非信仰的なもので、ある人は「方法的無神論」によって科学を推進すると言ったりした時代があります。「大学の神学」というのが言われて、日本でも小さな流行になったことがあります。私もそれを主張した一人でした。その時に方法的無神論によって学問をするという立場の先生がおられて、多少の議論になりました。信仰と科学の区別がありますから、無神論的科学を語る理由はあるでしょう。しかしそれでは科学を専門とする者は無信仰でなければならぬかと言えば、そうでなくただ方法論的に無神論と言うわけです。本当の意味では無信仰である必要はないのですが、科学や技術など大学が携わっている研究や教育の専門性には、世界観的には中立との主張がなされます。しかし世界観的中立性の中で養われる専門性であっても、それが精神性によって支えられる時、キリスト教的信仰が重要な位置を持つということを申し上げたいのです。科学は、非宗教的理性でなければやれないものではないのです。そうではありません。別の表現で言いますと、宗

教的理性によって科学をするということは十分可能な話です。これは細かなこととなりますが、近年フランクフルト学派のハーバーマスなどが「ポスト世俗社会」と言って、公共圏における宗教の意味を語って、非宗教的な理性の狭さに気付いています。理性は本来、宗教に対して排他的になるものではありません。もし宗教に対して排他的になったら、現代の世界で扱えない主題はいくつもあります。現代の世界はグローバルに考えて様々な宗教、それは多元社会とも言われますが、宗教的なものが非常に役割を果たしてきた現代社会です。この社会を理性によって捉えたとすれば、それは宗教排撃的理性によっては捉えられない話になります。ですからこの公共圏における宗教というものの意味に着目する必要があります。私はこのハーバーマスの考え方にある親近性を持っているわけです。理性はもっと大きな理性であって、それは先程の言い方と言うと真理概念はもっと大きい、信仰の真理と科学の真理は区別があるけれども、統合性があるということを考えさせられています。

精神なき大学ではなくて精神性を持った大学を形成していく時に、キリスト教大学はある戦略的に有利な位置にいるということを言いました。その場合に大学の覚悟として、キリスト教大学を気概を持って形成する必要があると思います。それは建学の精神と言われるものを深く掘り下げていって、時代に即応してそれを発言することが重大ではないかと思うのです。それで本大学の建学の精神、これは私にはわずかな聞きかじりですから、その由来などについてはわかりません。ただ表現されたところだけを大学からいただいた案内を見て、受け取っているわけですが、本大学での建学の精神は「世界のための命と光と愛」と言われています。このことを大学の覚悟をもって深く受け止め、現代におかれている大学の非常に重大な専門性と精神性の統合に挑戦していくとすると、この「世界のための命と光と愛」という大学の建学の精神の標語は、聖書による基礎づけによってはじめて力が湧くものでしょう。聖書が証言する「命と光と愛」に注目しなければなりません。これは極めてヨハネ福音書的な表現です。あるいは必ずしもヨハネだけに限定されない聖書全体にそれがあっても言えますが、非常に端的にこれを表現しているのはヨハネ文書です。

それでヨハネによる福音書を本日の講演の最初に聖書の箇所として提示しました。ヨハネの福音書の第1章の1節から4節を見てみたいと思います。

「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった」。

冒頭に「言」が出てきます。その「言」に「命」があり、その「命」が「光」であったと言われます。命と光がここにあり、愛はこの箇所には出て来ませんが、ヨハネによる福音書の中に愛は非常に重要な箇所、例えば3章16節などに「神の愛」として登場します。神が世を愛されたと

出てきます。ヨハネによる福音書における「命と光と愛」、それが本学の建学の精神に深く結びついたり、建学の精神の標語は聖書の証言に基礎づけられなければ現代の問題に挑戦する力を持つことはできないでしょう。

今、読みましたように、ヨハネによる福音書には神の言葉、神ご自身である言葉は、具体的にはイエス・キリストを指しますが、そのイエスキリストのうちに命があったと言われます。そして命は人間を照らす光であったと言われます。ですから端的に言って、世界のための命と光と愛と言われるのは、人間的な命と光と愛、自然的な命と光と愛が言われているわけではありません。ヒューマンな命と光と愛が語られているのではなく、もっと深みでそれを捉える話になります。「命と光と愛」は、聖書によると神の言葉による神のものであり、またキリストのことであります。キリストが命のパンであるという表現がヨハネの福音書6章にでできます。あるいは世の光と8章12節に言われます。そして神の愛を表していると13章1節にもあります。逐一聖書をお開きいただく必要は今はありません。ヨハネによる福音書の各所にそれが出てくることを申し上げたいわけです。

聖書は、神とその言葉、つまりイエス・キリストの命と光と愛を語っています。しかもそれはまさに聖書的な真理概念であって、ただその命や光や愛というものがそこに「ある」と言われているわけではありません。「ある」という存在概念は、ギリシャ的には最高概念のように言われますが、聖書では存在がそれほど最高なものとは思えません。「ある」ということだけでは話にならない。そうではなくて、むしろそれは行為し、働くものです。神の命、神の光、神の愛は動き出し、新しく造り出します。出来事を起こします。それは聖書の証言によると、信仰の対象であり、信頼に応える真実です。人間がそれを発見するというよりも、むしろ神が人間を発見し、人間を愛し、人間を照らし、人間を生かす。それが命、光、愛と言われているものであり、それが聖書の証言です。愛も光も命も本来神の行為であって、それが将来を切り開きます。ですから本学の建学の精神の中に言われている「世界のための命と光と愛」というのは、イエス・キリストの出来事の中に啓示されている神の言葉として、その神の真理であって、大学教育と研究はその神の真理を掘りどころとし、それに根拠をおき、それを目標として、教育し、研究をささげることではないかと思うのです。その点でキリスト教大学は単に理性的な大学ではない、単にヒューマンスティックな大学ではないのです。キリスト教大学は神の真理に信頼し、それを目標として研究し教育する大学です。そのことに覚悟をもって現代の教育状況や大学状況に挑戦する、そういう責任を委託されているのではないのでしょうか。ですから大学の中で哲学を回復するというのではまだ不十分です。そうでなくて、大学において信仰を回復することが重大になるわけです。

聖書の学びとしても一つ付け加えたいと思いますのは、レジュメにあげておきましたヨ

ハネによる福音書8章31、32節です。ここもよく大学の標語として用いられるものです。それをご紹介し、聖書の学びに加えたいと思います。

「イエスは、御自分を信じたユダヤ人たちに言われた。『わたしの言葉にとどまるならば、あなたたちは本当にわたしの弟子である。あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする。』」

ここに「真理はあなたたちを自由にする」という言葉が記されています。H A Λ H Θ E I A E Λ E T Θ E P Ω Σ E I T M A Σ (ヘー アレセイア エレウセローセイ ヒュマース)というギリシャ語です。これは国立国会図書館の玄関間の梁の上に、ギリシャ語で記されています。誰がそれを掲げることにしたかは存じません。しかしこの言葉は図書館の標語にとどまらず、いろいろな大学にあります。たしかフライブルク大学でこの言葉が記されていたと思いますが、真理という言葉は、例えばハーバード大学のエンブレムの中にも、ラテン語でVeritas と入れられています。ですから「真理はあなたがたを自由にする」が大学の標語としてあるのではないかと思います。東北学院は「世界のための命と光と愛」ですが、この命と光と愛は、神の言葉の持っている命、光、愛であり、それは神の真理と深く関わっている言葉です。

「真理はあなたがたを自由にする」という言葉は、一般には学問をして真理を発見する、そして真理を知ればそれによって人間は自由にされると考えられているかもしれませんが。しかしこの言葉は、聖書の中の言葉ですから、その真理は決して第一義的には学問によるのではなく、信仰の真理です。アレセイアですから、アは否定語でレイセ(覆われている)の覆いがはずされることです。覆われてない状態が、真理であるとギリシャ語は語っています。発見的な真理ということになるでしょう。ですが聖書の言葉はイスラエ尔的な背景をもっていますから、イスラエ尔的な真理概念で考える必要があると思います。あるいはギリシャ的な真理概念とイスラエ尔的な真理概念とを統合しながら、ここは理解する必要があると言うべきでしょう。その場合に真理はあなたがたを自由にするという意味の真理は、学問対象の真理、あるいは知られることを待っている、受け身で覆われているものが、覆いを取り除かれるのを待っている、そういう概念ではないと思います。そうでなくて「神の真理」は、私たちを愛する神の愛の真理です。私たちを照らす光、私たちを生かす命が、同じように私たちに示される真理で、真理そのものが神のものとして動くわけです。待っているのではなく、動く真理です。H A Λ H Θ E I A E Λ E T Θ E P Ω Σ E I T M A Σ (ヘー アレセイア エレウセローセイ ヒュマース)の、エレウセローセイ、すなわち「自由にする」という言葉は、未来形です。未来を引き起します。そういう真理概念、動的で将来を切り開く、創造的な真理概念が語られているわけです。ですからただ理性によって発見され鑑賞され、そこにある隠れている真理というようなものではなくて、自ら動き、活動し、アクションとなり、出来事を

引き起し、真実を示して、そして信頼にこたえて未来を切り開く、そういう真理が言われていると思います。真理そのものが人間を救済し、真理そのものが人間を自由にし、真理そのものが生かし、そして真理そのものが照らします。それが聖書の語っている真理、つまりイエス・キリストに示された神の真理と言ってよいのではないのでしょうか。

人間存在は、しばしば闇に引きずり込まれます。死に囚えられます。ヨハネによる福音書では、その後すぐにでできます。人間は罪に囚えられています。それも人間自身は知らずにです。ですから、ユダヤ人、ファリサイ人たちは、真理はあなたがたを自由にすると主イエスが語られたとき「自分たちはすでに自由だ」と言って、なんで今更自由にされる必要があるのかと言ったのです。自分たちが実は自由の中にいなくて、囚われ状態の中にあるということもわかっていないという話になるわけです。人間は闇の力、あるいは死の力、そしてパウロの言い方で言いますと、律法に拘束されており、しかも律法のない社会では世の諸々の諸力に拘束されています。そういう中で、真理はあなたがたに自由をもたらす、真理の方から働きかけて、光を与え、命を与え、救いを与えて、未来を切り開いて、自由にするとされているわけです。「世界のための命と光と愛」という本学の建学の精神、その理念は、真理が働いて、そして闇の力から解放し、死の力から解き放ち、世の諸力の奴隷状態から自由にす、そういう神の真理が働いていることが言われていると理解すべきでしょう。

そうしますと、「真理はあなたたちを自由にする」という言葉は、国会図書館よりも、また他のどの大学よりも、それがふさわしく聞かれ、理解される場所があります。それは神の言葉が語られる場所、礼拝です。そして大学としては、そういう大学こそがふさわしいと言うべきでしょう。神が賜わる自由は人間を人間的な実存の深みにある従属から解放します。そして神から離れた実存の闇から、あるいは罪への隷属から解放します。そして光の領域、命ある領域にいれます。「神の真理」は、人間を死から解放する命の力であり、闇から解放する光の力です。それはまた、憎しみや敵対から解放する愛の力として働きます。キリスト教大学はこの神の真理に聞く、つまり神の御言葉に聴くことを根本にしています。そういう機会と場所を持つのがキリスト教大学です。キリスト教大学が礼拝をもっているのは、そのためです。これが建学の精神の根拠と活性化の重大な場所です。

礼拝に出ることは、授業を中断しなくても、授業が終わってから出られるでしょう。礼拝は他のものの中断にはならないかもしれません。しかし前の時間が研究室で研究している先生方にとっては中断しないと礼拝に出られません。実験を中断して礼拝にでる。毎日であればいけないかという、これについては、大学の方針があって私に答える資格はありません。毎日生活を中断させていたら大変という気持ちもなくはありません。しかし一週間に何度か中断して礼拝に出ることは重大なことです。日曜日に教会の主日礼拝に出ることは一週間の生活を中断させるわけです。そのことは非常に重大で人生の営みを断念するわけですか

ら終末論的な行為です。何の断念もなしに礼拝に出ることは神の前の礼拝に出ることにならないでしょう。中断し、断念するとはどういうことか、すなわちその仕事を終わらせて、神様に捧げる意味があります。あらゆることの終りに神の御前に立つのです。

真理ということの中で、真理は「捧げる行為」という仕方でヨハネによる福音書の中で語られている箇所があります。礼拝の中で御言葉を聴くことは礼拝の重要な要素ですが、御言葉を聴くことは受け取る、与えられて受け取ることになるでしょう。神からの働きを受け取るわけです。ですが同時に礼拝の中には、私たちの方から捧げる面があります。讃美を捧げ、祈りを捧げます。その前に、自分の仕事を中断させて、その礼拝に出ますから、自分の仕事を捧げているわけです。キリスト教大学というのは専門的な研究と教育の業を捧げているということになります。捧げることによって捧げられたものの意味が出てくるのです。人生全体がそういうことだと思のですが、人生は結局終わるわけで、終わらなかつたら人生の意味がなくなります。終わることがありがたいのです。人生が終わることによって、人生全体を捧げられます。

語っていることが少しわかりにくい話になっているかもしれませんが、キリスト教大学の使命の中に精神性と専門性を統合させることがあり、その使命を果たす可能性がどこにあるかと言いますと、御言葉による真理と光と命を聴くこと、その働きを受けることに可能性の根拠があります。それは礼拝に結びつきます。同時にそこで、自分の営みを捧げます。中断してそこに出る。そういう仕方で自分の仕事をお捧げする。捧げることによってその仕事は、むしろ深い意味を持ちます。神様にお捧げする供え物として自分の研究、自分の営み、教育も含めてそれがあつたということ、それをキリスト教大学は表現しているわけです。

ですから、少々意地の悪い言い方で申しますと、一般大学に向かって「精神性と専門性の統合は難しいでしょう。どのような理性概念、真理概念でお宅はやっているのですか」と聞きたいです。真理概念なしに大学を建てていくことはできないはずで、その時に、捧げることに意味を持つということも申し上げたいと思います。それがキリスト教大学の使命というもののあり方だと思います。真理概念を知って、真理に身をさらし、真理に働かれると共に、そこに自分とその営みを捧げる。その意味でキリスト教大学の使命達成の場所として、礼拝の場があるということです。このあり方は、もう久しく欧米の大学では失われていると思います。

余談になりますが、オックスフォードやケンブリッジのそれぞれのコレッジは、みな修道院の形状をしています。中庭を囲む回廊があります。コレッジは修道院を原型にしたからです。ただ原型にただけでなくシステム上も近いものがあつたのではないのでしょうか。ですから19世紀半ばまで、オックスフォードやケンブリッジで教える教師には、チャーチ・オブ・イングランドの38箇条の誓約が求められました。司祭の条件が適用されたのです。「38箇

条」の信仰箇条に従える人々が教えていました。逆にいうとチャーチ・オブ・イングランド(イギリス国教会)に属さないフリーチャーチ(自由教会)の会衆派の牧師たちは、コレッジの教師になれなかったわけです。非常に優れた神学者がチャーチ・オブ・イングランドの外にいて、そこでは教えられませんでした。しかし 19 世紀半ばから変わってきました。会衆派のコレッジもできるようになりました。私が申し上げたいのは、キリスト教的精神性というものをもった大学が原型にあったということです。しかし、その力を今どれだけ発揮できているかと言えば、大変希薄になっているでしょう。

いろいろな大学が精神性の衰弱にあります。それならば、日本のキリスト教大学でやってみてはどうかという気持ち起きるのではないのでしょうか。他の事情で、キリスト教大学が非常に困難になって、地方の名門のキリスト教大学が難しくなって崩壊的な状況にあると聞いています。甚だ残念に思います。キリスト教大学こそが挑戦できる課題が、今、社会に満ちているのではないのでしょうか。欧米の大学もそれができていないとなると、日本のキリスト教大学に期待したいと思います。中には専門性の方だけに夢中になっている大学があって、折角のキリスト教大学としての精神性が生きていない大学もあります。逆に精神性の方は言われているけれども専門性がうまく展開されてない大学もあるでしょう。ですからその両方を一つ統合させてやっていく、その課題に挑戦してもらいたいと思います。

言うは易く行うは難しで、学長先生を前にして重い課題を押し付けるようですが、ぜひそのように仙台の地で、東北学院大学ありとはっきりと提示する、そういうキリスト教大学の使命と可能性に挑戦していただきたいと願っています。まとまりのない話で時間をとって恐縮でした。最後に一言お祈りをして私の講演を終わらせていただきます。

天地の創り主、全能の父なる御神。東北学院大学の教職員修養会に招かれ、キリスト教大学としての使命とその可能性について語る機会を与えられ感謝をいたします。課題は大きくありますけども、しかしあなたの前に立って想う時、そのことは当然のことであり、この課題を受け止めて、またそれを担い継いで、あなたの聖名を褒め称えることができますように、そのような東北学院大学の歩みであることができますように導いてください。

その責任に与っている学長先生を初めそれぞれの先生方、また職員方の上にあなたの憐み深き御霊の支えがありますようお願い致します。感謝と願いとを主イエスキリストのお名前によって御前にお捧げ致します。アーメン

全体懇談

「映像で観る『東北学院の100年』 — 創立130周年を控えて」

東北学院史資料センター調査研究員 日野 哲氏

「映像で観る『東北学院の100年』—創立130周年を控えて—」

東北学院史資料センター調査研究員 日野 哲氏

はじめに

「東北学院の100年」は、ちょうど30年前の創立100周年記念で作られた映画です。今回はそれを観るのがメインですが、私はこの3月の定年退職後、土樋キャンパス礼拝堂地階にあります東北学院史資料センターで週3日の嘱託職員として勤務しており、今、東北学院の歴史をもう一度振り返る作業を先生方と協力して行っています。その中で、この映画の中ではほんの1分弱ぐらいしか放映されない東北学院の草創期、即ち創立の1886年(明治19年)から、ホーイと押川が相次いで東北学院を去っていく始めの15年間、この中に本当に大事な情熱や、創立に関わった人たちの想いが詰まっているということ、この歴史を振り返ってみて改めて実感することができました。そのことをぜひ初めにご紹介したいと思い、資料を用意いたしました。

100周年の映画の内容につきましては、後でこの映画に入る直前にご説明いたしますが、「東北学院の草創時代—ホーイの貢献を中心に」という最初の15年間の年表と、同じく「ホーイの報告を中心に」という『百年史』と『ホーイ伝』から抜粋したホーイの手紙や報告書を中心とした資料の2種類を用意いたしました。実はその後、PowerPointも作ってみようと思い、昨日やっと完成しましたので、今日はPowerPointの方をご覧いただいて、お手元の資料はその前後をもっと詳しく見てみたいという場合に参照していただくのが良いと思います。

当時の時代背景

この東北学院が創立された草創時代、これはどんな時代だったのかということ、年表をご覧いただきながら簡単に振り返ってみたいと思います。詳細は省略いたしますが、この時代は明治維新以降、日本の私学が大いに栄えた時代でもあったようで、様々なタイプの私学が創立されました。その中でキリスト教学校は、当時必要とされた外国語、特に英語を学ぶために外国人宣教師によって英語学校等として開校されました。しかし同時に、そのことは民主主義や啓蒙主義などを育む土壌ともなり、当時国民の思想統一を学問のあり方で実現しようとする国策によって、例えば年表ですと1886年(明治19年)、まさに東北学院が創立されたこの年に「帝国大学令」が公布されますが、この帝国大学をトップとするピラミッドが

形成され、キリスト教学校は、国家原理に反する危険性をもつものとして一番下に取り扱われることになりました。その後もキリスト教学校はたびたび存廃の危機にさらされるのですが、特に 1899 年(明治 32 年)の「訓令第 12 号」では、国公私立での宗教教育、あるいは宗教的儀式が禁止されます。でも、国公立ではそもそも宗教教育は行っておりませんので、当然ターゲットは私学、特にキリスト教学校で、この宗教教育、宗教的儀式が禁止されるということは非常に大きな問題になります。このような時代でした。

創立者たちの動向

年表で主な出来事だけを振り返ってみますと、1885 年(明治 18 年)、この年の 12 月に三校祖の一人ホーイが来日いたします。そして押川と出会い、翌年には仙台神学校の授業が開始されるわけですが、今申し上げましたように帝国大学令が公布される、あるいは、4 月には師範学校令、小学校令、中学校令など、様々な学校制度が整備されていくということで、国策として教育で国の統一を図ろうとする動きがありました。そして 1890 年(明治 23 年)には教育勅語が発布され、その翌年の 1 月には有名な内村鑑三の不敬事件が起こり、押川等はこれに激しく抗議をいたします。そして、その翌年の 1892 年には姉妹校である宮城女学校、現在の宮城学院でもストライキ事件が起きます。これにより、有名な相馬黒光他 5 名が退学処分となりますが、その理由は彼女たちが日本精神を基調とした教育を要求した、あるいは、学校の管理運営を日本人に委ねることを要求したことによります。当時の校長はブルボーというドイツ改革派から派遣された女性宣教師でした。

1894 年(明治 27 年)になりますと日清戦争が起きます。このときキリスト教会は戦争支持、戦勝祈願へ突き進むことになります。他方、外国の宗教としてのキリスト教に対する迫害も厳しさを増していく、そういった状況です。この時期、もう一人の創立者押川は何をしていたかといいますと、この年の 12 月に大日本海外教育会を設立します。会長は当初押川で後に大隈重信に交代しますが、要するに、朝鮮や中国が欧米列国によって属国化され半植民地化されていくことへの警戒、やがて日本も同じような憂き目にあうのではないかということで、対策を講じておく。さらに 1896 年(明治 29 年)の 1 月、押川は北海道同志教育会を設立します。これは北辺防備、即ちロシアへの対応ということになります。それに呼応するかのように、1898 年(明治 31 年)にはロシアは清国から大連、旅順の租借権などを獲得して中国の半植民地化が激化していくことになります。そして、翌年には今申し上げた訓令第 12 号により宗教教育、宗教的儀式が禁止されます。これまで外国人は居留地という、外国人が特別に許可されたところにだけ居住しており、主にそういったところで外国語教育、特に英語学校が行われていたのですが、まさにこの年は内地雑居が始まる年で、国も大いに警戒をした、ということになります。こうして創立から 15 年の間で、創立者たちは日本のナショナリズムと対峙あるいは協調しながら学校をつくっていくことになりました。

ホーイの来日

この時期は、特にホーイの貢献が非常に大きかったと私は感じておりますので、これからは PowerPoint をご覧いただきながらホーイの報告を中心にお話ししたいと思います。

ホーイは、1885年(明治18年)12月1日にアメリカ西海岸から船で横浜に上陸いたします。ホーイは東海岸のランカスターにおりましたので、まず大陸の横断に列車で約1週間、それから太平洋横断に船で3週間、合計約1ヶ月を要して横浜に到着しました。到着した時点でホーイは、どこで伝道活動をするのかまだ決まっていなかったといわれています。そこで同じドイツ改革派から最初に派遣された宣教師のグリングのもとに身を寄せることにして、12月1日にグリングの家に到着します。夕食の時にホーイは、「わたしはどこに行ったらいいのでしょうか」と質問をしました。グリングは、押川に洗礼を授けたバラと以前からいろいろと話し合っていたようで、バラはその直前仙台を視察して、仙台がどのような状況になっているかについて、だいぶグリングに話をしていたようです。それでグリングは、「今仙台でどのような好機が開けているかお話ししましょう」ということでホーイに話を始めました。するとホーイは話を聞き終わるや否や、「私は仙台に呼ばれているような気がします」と言って仙台に非常に興味を持ち、早くも翌週、来日から1週間後の8日には、ホーイとこのグリングは仙台に向かう船の上にいたということですから、かなり素早い行動をとったことがわかってと思います。

グリングは、ドイツ改革派教会の最初の日本派遣宣教師でした。彼は、東京を中心に伝道活動を行っており、東京に学校をすでに建てておりましたが、教会としては元大工町教会、これはやがて神田教会となり、現在の代々木中部教会と名称は変わりますが、東北学院の神学部卒業生も続々と牧師として奉職する教会となりました。グリングはのちにドイツ改革派とは決別して聖公会に転じ、京都の平安女学院の初代院長になります。

ちなみにもう一人、ホーイの前に来日した二人目の宣教師でモールという方がいます。この方も東京を中心に伝道し、彼の教会は植村正久の教会と合同して富士見町教会へと成長していくことになります。ホーイは三人目の宣教師として派遣されました。

グリングとホーイの二人は、横浜から沿岸郵便船で石巻の万石浦に下車し、小舟で松島を経由して塩釜に上陸しました。そこから仙台までは人力車でした。ちなみに最初に東北本線で仙台に着任したのは、明治21年1月のシュネーダー夫妻ということになります。

仙台視察後、ホーイは直ちにミッション(伝道局本部)に報告書を送ります。仙台の印象を書いた後、非常に重要なことを書いています。「数年前、一人の日本人牧師[押川のこと]がこの町でキリストを述べ伝え始めましたが、今では130名の会員を持つ教会に成長しました。」これは当時の仙台教会、今の仙台東一番丁教会になりますが、ホーイが「日本に着いて3日目(12月4日)のこと、この日本人牧師が私に向かって、自分の所に来て手伝ってくれと申しま

した。」これが押川とホーイの出会いということになります。「彼らが願っているのは、その美しい町の中にキリスト教の施設を持つことです。彼らは女子学校を欲しております。女子教育についていえば、日本で最も急を要する場所と思われる。」これがホーイの見解です。自分は「まず英語を教えることから取りかかり、いずれは聖書と信仰問答を目指すつもりです。もしかすると、男子学校がそこから生まれるかもしれません。」このホーイの手紙から、当初は女子学校が先であった、ということがわかつています。

仙台での活動開始

こうして仙台での伝道が開始されます。ホーイは1月早々には仙台の日本家屋に移ります。この時には既に多くの青年が自分の周りに集まってきていましたので、男子校を建てる好機が目の前にあることを感じたとしても不思議ではありません。そのことをミッションに報告しましたが、支持は得られませんでした。伝道局本部では先に来た2人の宣教師がすでに東京で学校を開校していたという事情もあり、改めて仙台に学校をつくる必要はないのではないか、とっていました。そこで、押川とホーイは、先に既成事実を作って、それをミッションが認めていくという手段を取ろうとしたようです。その契機となったのが、「ある日のこと、押川兄弟が私の家にやって来て、12枚の銀貨を見せました。」これは後に有名な物語になるのですが、一人の未亡人香味チカという婦人が12枚の銀貨を携えてそれを仙台神学校の創立のために献金をしたというのです。このことが聖書の中でイエス・キリストが立派な行いとして褒めたレプタ2枚を捧げたやもめの話と重なり、ホーイは大いにこれを宣伝し、そしてミッションに献金を煽るということになっていきます。ホーイはさらに続けて、「私が耳にしたのは、6人の青年が私の元に来て、福音の伝道者になる訓練を受けたいと言っているということでした。そしてその時、その場で、私は押川兄弟に対し、これから1年間私がこの青年たちの生活の面倒を見ることをおごそかに約束したのです。」これも後でご覧いただきますが、神学校創設時のホーイの会計簿には、最初の1年間、6名の学生の生活を支える経費のすべてを、ホーイ一人が支えたということが記されています。こうして最初の教師、押川とホーイ、そして最初の6人の生徒で仙台神学校が開校されます。『百年史』には、この6人がそれぞれどのような人生を歩んだかということが詳しく書かれていますが、ここでは省略させていただきます。

これが12枚の銀貨の一枚です。伝道局では、ホーイの報告をもとにドイツ改革派の機関誌で盛んに「最初の献金、最初の献金者」としてこの香味チカを褒めたたえました。一分銀は12枚でどれくらいの価値があるのかについては、『百年史』にも書いてありますが、おそらく約50日分の労賃(40～50万円)に相当すると思われる。ですから、それで校舎が建つほどの金額では決してないのですが、金額ではなくその行為自体が非常に大きなインパクトを内外に与えたということになります。この一分銀は、その後ずっとランカスターに1枚だけ

保存され展示されていたのですが、本院の創立 100 周年を機に返されて、現在は当資料センターに展示してあります。ランカスターでは、香味チカという婦人を紹介するのに、英語で「カミ」は「香と味」(Fragrant Taste)、「チカ」は「近い」(nearness)即ち、「香り高い捧げものを神に捧げた非常に神に近い存在」というような訳を付けていました。非常に意味のあることだと思います。

これがホーイの会計簿です。これも資料センターに展示してあります。東北学院は最初なんと呼ばれていたのかにご興味がある方もおられると思いますが、ホーイは「Sendai Theological Seminary」と書いています。しかも 1886 年(明治 19 年)の 6 月 1 日から翌年の 5 月 31 日までの会計簿です。支出については、6 人の生徒を 1 年間支えるためにメキシコドルで 390 ドル、その他に書籍代として 32 ドル、合計 422 ドル。一方、収入については「by “a Friend”」即ち、「一人の友人」からの献金となっています。これは紛れもなく先程の手紙からするとホーイ自身であるということがおわかり頂けると思います。

最初の建物

さて東北学院の最初の建物は何だったのかということですが、これは寄宿舍でした。ホーイは報告書の中で、神学校が自分にとって非常に大きな存在であるということを繰り返し述べたあと、その教室もなく机もなく、学生はどんどん入って来るが宿舎もないという状況の中で、それでも「私たちはこの学校を断念いたしません。私たちは希望を失いません。」と書き、続けて「私は主キリストのために、喜びをもって、負うべき重荷をあえて引き受ける決心をいたしました。」として、教会の敷地の半分を自分で購入したと書いています。当時、南町通りの敷地が 2300 ドルで売りに出ていたのを当初は仙台教会が購入するのですが、仙台教会は 1300 ドルしか蓄えがなかったため、残り 1000 ドルが支払えず危なかったのを、ホーイが 1000 ドルで購入したということになるわけです。その購入した 1000 ドルの土地の上に「小規模ながら快適な校舎を建て始めました」と報告しています。これが寄宿舍を兼ねた最初の校舎「ジョン・オールト記念寄宿舍」となりました。宮城学院に最初に赴任した女性宣教師の一人、ミス・メアリー・オールトはホーイと結婚しますが、このミス・オールトの父親はすでに亡くなっていて、その遺産をもとにしてジョン・オールト記念寄宿舍が建てられました。ミッションは盛んに反対します。父親の遺産をそんな風に使っていいのか、本当に奥さんは賛成しているのかと言うわけですが、しかしホーイは毅然としてこれを建て上げました。

神学校の校舎についてもホーイは盛んに建ててほしいとミッションに要求します。しかし伝道局本部は絶えず資金難に苦しんでいました。特にこの時期は、同じくミッションが支援している宮城女学校の校舎と寄宿舍、それに宣教師館も 2 軒建てたばかりで、更にこれ以上新たな校舎を建てる余裕はないというのが当時のミッション内部の状況でした。そこでホー

イは、もし来年の春までになんらかの結論を出せない場合は「私は自費で必要な建物を建てること提案します」と、ミッションに決断を迫ります。「神学校の校舎は今必要なのです。私はこの建物を主に祈り求め続け、もしも必要とあればその重荷を私に負わせてくださるよう」、「主のためならば苦難を少しも恐れませんが」。ここには、ホーイの本当に決然とした姿勢が現れているように思います。その翌年、伝道局は条件を2つ示して一応建築を承認します。①総工費は5000ドルを超えないこと、②建物は伝道局の所有地か、あるいはオールト記念館の土地に建てること。オールト記念館はすでにホーイが捧げていますが、これは将来伝道局が名目だけの代価で買い上げることになっており、とりあえずミッションが持っている土地に建てることを条件にしました。そしていよいよ建築に着工しますが、ホーイは伝道局に対して、オールト記念館と仙台教会に残されたわずかな土地を500ドルで自分で買って、それを神学校へ寄贈したいと申し出ます。ただ名前を伏せたままということを条件にしました。すなわち、神学校の用地もホーイが買い上げたということになります。

当時、神学校の校舎はどこにあったのかということですが、地図をご覧くださいと、南町通り(東西)と東二番丁通り(南北)の北西角、現在タイショー・パーキングがある場所に仙台教会、その西側に東北学院の神学部校舎がありました。現在は仙建工業ビルが建っており、その前に「東北学院発祥の記念碑」があるのがご承知の通りです。この地図は、シュネーダーが1901年(明治34年)に院長に就任する時に、この東二番丁の土地を中学部の用地としてほしいということをミッションに書き送った手紙に添えられた手書きの地図です。ここが購入予定の中学部用地、向かい側が宮城学院です。これがシュネーダー邸で、その隣りが他の宣教師の住居という位置関係でした。

強盗事件とその後

その後、あの「強盗事件」というのが起きます。これは建築許可がミッションからでた直後、伝道局から建築資金が送られてきたその日の夜、強盗がホーイ家に入りました。ホーイはしばらくは誰にも話さなかったようです。建築資金ですから相当な金額です。7000円、即ち7000ドル(当時の換算レートはほぼ1対1)が奪われましたが、ホーイは誰にも黙って自分で多額の借金をして仙台神学校の校舎を建てました。しばらく後(約6年後)になってホーイはやっと周りの勧めでこのことの全容を明らかにします。

その日の夜、「郵便」という声でホーイは何の疑いもなく玄関先に出ました。そこに3人の覆面をした男が立っていて日本刀を突き付け、宣教師団の金庫に案内せよと迫ったのです。つまりその日に入金することが分かっていた人たちの計画的な犯行ということになると思います。そして7000円を取り出して逃げたのです。大部分は校舎の建築費、他は宣教師団の資金でした。ホーイは呆然として立ちすくむのですが、最後に彼は「主よ、この重荷を私に負わせてください」と、自分一人で負う決断をするのです。こうして建ったのがこの仙台神学校

の校舎です。その強盗事件がわかったあと、ミッションは最終的にホーイが借り入れた金額に利息を添えて全額払い返しました。さらにこの補償金は、やがてホーイが中国伝道へと再出発する際の有力な資金となったのです。

ホーイはある手紙にこんなことを書いています。「この激しい戦いと重荷に満ちた5年の間に、私は神学校のために、少なくとも5000ドルの献金を捧げるという無限の喜びを味わってきました。」当時のホーイの独身の給与は年俸700ドルです。結婚すると1200ドルになります。ホーイは来日して2年後に結婚しましたので最初の2年間で $700 \times 2 = 1400$ ドル。3年間結婚したとして3600ドル、合わせてちょうど5000ドルです。つまり、自分の宣教師の給与全額を捧げたと等しいということになります。もちろん先ほど説明しましたように義父の遺産も捧げていますので、実際給与全部を捧げたというわけではありませんが、それくらいホーイは東北学院を愛していたということになると思います。

ホーイの辞任

やがてホーイは東北学院を辞任します。理由は主に3つとされています。1つは健康問題。彼は重い喘息であるというのがしばらく後に気付きます。はじめは、仙台の広瀬川のほとりに最初の住居がありましたので、蚊に刺されてマラリアになったのではないかと心配をしました。さらに日本家屋ははじめじめして湿気が多いので、そのせいではないかと。でも最終的に重い喘息だということがわかりました。そこで転地をする必要があったというのが一つです。

それから職務権限をめぐる院長押川との関係です。当時ホーイは理事局長と副院長、押川は院長という立場で、様々な職務権限の争いがあったようです。1893年(明治26年)には、ホーイは理事局長と副院長の辞職願を出します。これは一時保留になるのですが、その翌年今度は、押川も院長の辞職願を出す。二人とも辞表を出したので、二人欠席のままで理事会が緊急で開催される、ということが起こりました。でも一旦ホーイは辞任を撤回します。そして、撤回した後、ホーイは一旦アメリカに帰国するのですが、これは後でご報告いたします。

3つ目の理由は、宮城中会、これは押川を中心にして仙台教会、そして宮城県内外の様々な教会で作った組織、いわゆる現在の東北教区のようなものですが、そういった教会の連合体と、在日宣教師団(ジャパン・ミッション)との関係の悪化ということがあります。冒頭に説明しましたように、右傾化の流れのなかで、日本の教会もミッションからの自給独立を目指していきます。在日のミッションを代表する立場にあったホーイに対する攻撃も非常に強くなっていく。攻撃をする牧師の中には、ホーイが数年間にわたって自分が本当にかわいがってきた、お金も出してあげた、そして牧師に育てた、そういう牧師たちも自分を攻撃するようになった。これは非常にホーイにとっては痛手であったようです。それから中会による管

理監督権の確立がありました。中会は、当初は在日ミッションが自分できちんと伝道して教会や伝道所をつくってくださいよと言っていたのですが、やがてそのミッションが始めた伝道地もこの中会の管理監督下に置くという、ある意味で一方的な宣言をして対立することになります。どうやらこれには従来から自給独立を唱えていた押川も大分関与していたようです。このようなことに加えて、最終的には中国伝道への献身という、ホーイ自身の決断、これが一番大きかったのかもしれない。

ホーイは、先程申し上げた一時辞任を保留した後に帰国しますが、その帰国している最中に改革派教会の全国総会に出席します。総会の中で改革派教会は中国伝道を開始することを決議するのです。そして最初の宣教師としてホーイを推薦しますが、ホーイは当然断ります。そしてホーイは日本に帰国しますが、帰ってきたらまた喘息が再発しました。そしてホーイは喘息の治療をかねて中国に行きますが、なんと喘息は治まるのです。自分の健康にも良いと感じたホーイは、中国伝道の方針を固めて日本に帰って来ます。するとまた喘息が悪化します。最終的に在日宣教師団は転地を決議し、本国のミッションも中国へ出発する許可を与え、ホーイは 1899 年(明治 32 年)10 月に一家を挙げて仙台を出発することになるわけです。

最後にホーイは日本を去る前にこんな手紙を書いています。

「私たちは長崎から乗船して上海へ向かったのですが、日本を最後に目にして私の心はひどく痛みました。現地時間に合わせるために時計を 1 時間遅らせた時、私はこう思いました。『このように私は自分の人生を 14 年前に巻き戻し、そもそもの初めからやり直すのだ』と。」

三校祖の再会

それから 25 年後、1926 年(大正 15 年)の創立 40 周年記念の時、現在の土樋キャンパス本館の落成式に合わせて行われた創立 40 周年記念式典ですが、その時に三校祖が 25 年ぶりに顔を合わせるようになります。その翌年、ホーイは中国が政治的に混乱し、宣教師が次々と国外退去をさせられる中、ホーイも追い出されてアメリカに帰国する船の上で亡くなります。押川はその翌年に東京で亡くなりました。3 人が顔を合わせたのは、この 40 周年が最後であったということになります。

これがホーイの貢献、まさに東北学院草創期の出来事でした。

創立 100 周年記念映画

これからご覧いただく映画は、創立 100 周年記念行事の一環として、記念映画作成成分担委員会が中心になって作られました。委員長は当時二部長をされていた森健一先生です。映画の中にたくさんの映像のほかに音声も使われています。オルガン演奏は今は亡き伊澤長俊先生です。コーラスはまだ元気だった頃のグリークラブとキャロラズ。挿入歌として、100 周年のイメージソングとしてさとう宗幸さんが作曲し歌った「君がいたから青春だった」が使われています。

映画の内容は、プロローグとして 100 周年の記念式典、当時の児玉理事長、情野院長のことが流れます。そして東北学院の沿革として黎明期、草創期、興隆期、そして苦難、復興、発展というふうにな東北学院の歴史をたどっていきます。そして 100 周年当時の東北学院の現況がキャンパスごとに紹介されます。最後に、100 周年の記念行事をいくつか紹介し、エピローグは、100 周年の秋に行われた泉キャンパスの起工式です。最後のナレーションとして次のように語られます。

「東北学院は創立 100 周年を機に、建学の精神を継承し、世の光、地の塩として社会に貢献する人材の育成を固く決意、そして今東北学院は第二世紀への歴史を力強く踏み出したのである。」

当然のことながら、100 周年までですので、その後 30 年の間にも様々なドラマがあったことはご承知の通りです。しかし、今この草創期から 100 周年までを振り返ることは非常に意味のあることと思います。残った時間、ぜひご覧いただきたいと思います。

東北学院の「草創時代」

—W. E. ホーイの報告を中心に—

(『東北学院百年史』及び『ウィリアム・ホーイ伝』より抜粋)

1. 日本からの第一報 (1886年1月6日『メッセンジャー』)

「日本までの長い道中、いつも神が私と共にいまし、摂理をもって守って下さったことを心から感謝し、私は自分が伝道の地として選んだこの国に無事に到着したことを喜びをもって報告いたします。大陸横断の列車の旅、太平洋を渡る船の旅は快適で示唆に富むものでした。・・・私は12月1日の午後4時に横浜に上陸いたしました。」

2. 仙台への招き (グリングの回顧：1890年4月17日『メッセンジャー』)

「私たち(グリングとバラ)が(仙台へ)行くべきかどうかを論じていた頃、12月1日、ホーイ兄弟が私の家に到着した。その翌日、夕食の祈りに、短い会話の後で、きわめて意味深いことに、彼はこう言った、「ところでグリングさん、私はどこへ行ったらよいのでしょうか」。私は答えた、「・・・今や仙台でどのような好機が開けているかはお話しいたします」。・・・私が話し終わるや否や、彼はただちに答えて言った、「グリングさん、私は仙台に呼ばれているような気がします」。私は自分の喜びを伝え、日本中で仙台ほどホーイが役に立つ所はないだろうと述べた。次の月曜日(12月8日)の午後には、ホーイと私自身は仙台へ向かう船の上にいた。」

※二人は横浜から沿岸郵便船で石巻(萬石浦)に下船、小舟で松島を經由して塩釜に上陸、人力車で仙台に向かった。

※グリング：ドイツ改革派教会の最初の日本派遣宣教師

都心(日本橋)や埼玉県に伝道。日本橋に教会(元大工町教会⇒神田教会⇒代々木中部教会へ)と学校(後に閉校)を設立。

※モール：二人目の日本派遣宣教師(ホーイは三人目)

都心(麴町)に教会(番町教会⇒植村の教会と合同し富士見町教会へ)を設立。学習院等で教鞭。

3. 仙台視察後の報告 (1885年12月18日、伝道局宛のホーイの手紙)

「仙台は重要な、そして将来性豊かな地方の中心都市で、新しい時代の胎動をひしひしと感じ始めている町です。それは預言者的力と確信に満ちております。そこでは青年期に特有の力強く精気に富み、勇気に溢れた何物かが、内部から生まれつつあることが感じられます。この町は現在も大いに発展を遂げております。いずれは帝国政府の中で大きな影響力を持つに至るでありましょう。この約束に満ちた町は、六百万の人口を持つ北

日本七県の中心都市です。健康と体力を保持するためにも、仙台は東京よりもはるかに好ましく思われます。・・・

数年前、一人の日本人牧師がこの町でキリストを宣べ伝え始めましたが、今では百三十名の会員を持つ教会に成長しました。私が日本に着いて三日目（※12月4日）のこと、この日本人牧師が私に向かって、自分の所に来て手伝ってくれと申しました。仙台のキリスト者たちは、神が私を彼らのもとに遣わし、良き知らせ（福音）を宣べ伝えさせて下さるようと祈っております。・・・彼らが願っているのは、その美しい町の中にキリスト教の施設を持つことです。彼らは女子学校を欲しております。・・・女子教育について言えば、日本で最も急を要する場所と思われます。・・・

私はまず英語を教えることから取りかかり、いずれは聖書と信仰問答を目指すつもりです。もしかすると、男子学校がそこから生まれるかもしれません。・・・

私にとって仙台は、すでにわが心の宿る所となりました。そして疑いもなく、宣教師としての私の思いすべてのこもった、永い住まいの地となることでしょう。」

4. 仙台での活動開始（最初の学生6人への支援）（1895年ホーイの10年後の回想）

「1886年1月13日、私は最初の日本家屋に移りました。若い私は幸せな気分に満たされてきました。・・・（多くの青年が私の周辺に集まって来ている。）私は男子校を建てる好機が目の前にあることをすぐに感知し、伝道局本部に事情を書き送りました。しかし、激励は与えられませんでした。・・・押川兄弟と私はしばしば共に集まり、事態をめぐって討論を重ね、そのために祈りを合わせました。

ある日のこと、押川兄弟が私の家にやって来て、※十二枚の銀貨を見せました。これは周知の物語りですが、押川兄弟は目に涙を浮かべ、「私たちの祈りは聴かれ始めた」と言いました。・・・私が耳にしたのは、六人の青年が私のもとに来て、福音の伝道者になる訓練を受けたいと言っているということでした。そして、その時、その場で、私は押川兄弟に対し、これから一年間私がこの青年たちの生活の面倒を見ることをおごそかに約束したのです。私の薄い財布からこの約束を守るには、最も厳しい切り詰めと、最も組織的な自己否定が必要でした。・・・

私はこの分は神に、この分は自分にと振り分けました。空腹を抱えたままで過ごすことも一再に留まらず、身につける物といえば継ぎ布の当たった古着だけでした。夜中には寒さを防ぐため洋服をかぶって寝たものです。私たちが集まり始めたのは、仙台でも最も町外れの地域でした。最初の冬にはストーヴも買えなかったので、小さな火鉢の炭火で手の指を温めるだけでした。しかも、この一年は私の生涯で最も幸福な年でした。」

※「十二枚の銀貨」：寡婦であった香味チカが、老後のために蓄えた一分銀12枚を捧げたこと。ホーイは内9枚を買って伝道局本部に送った。

※「ホーイの会計簿」：神学校の初年度の経費（422ドル）は、全額“a Friend”からの献

金と記載。

5. 押川・ホーイ・新島・デフォレストの四者会談（1914年デフォレストの回想）

「(1886年6月1日)とうとう最後の切札。ホーイ、押川と夕食を共にする。…押川は心を開いて、親しみ深く、キリスト教的な語り方をした。(教会) 合同が今のところ失敗に終わりそうなので、彼としてはまったく断念の決心をしたこと、心からの願いだった計画を放棄することを私に告げ、私たちが受けている大きな招きに成功を祈ると言った。次いでホーイが同じような口調で話したが、無念さは隠しようがなかった。しかし、ホーイの言うところでは、私たちは同じ主によって導かれており、その導きのもとにあるからには、争ってはならないと信じている、と。それは悲しみの涙の時であり、私にとっては心寂しい勝利であった。」

6. 最初の建物（寄宿舎）の建築（1888年8月3日、伝道局宛のホーイの手紙）

「私たちの神学校が私にとって、外国伝道事業の中でも、最も貴重なものの一つであることは申し上げるまでもありません。…この9月には多くの新入生が私たちの学校にやって来るでしょう。…このことは喜ばしいのですが、残念なことに、私たちは教室を持たず、また適当な場所も見付からないのです。私たちは伝道局に援助を求めましたが、教会の献金が不足で、援助は与えられておりません。私たちはこの学校を断念いたしません。私たちは希望を失いません。…私は主キリストのために、喜びをもって、負うべき重荷をあえて引き受ける決心をいたしました。私は仙台のキリスト者たちの所有する教会の敷地の半分を購入いたしました。価格は千円（メキシコ銀で千ドル）でしたが、私はその一部を現金で支払い、残りは手形にしました。この敷地に私はすでに小規模ながら快適な校舎を建て始めました。費用は八百円から九百円かかるでしょうが、それによって現下の窮状から救い出されることになるでしょう。私は在日宣教師団にも外国伝道局にも、一セントたりとも支出をお願いするつもりはありません。」

※南町通りの全敷地購入費 2,300 ドル、内、仙台教会が 1,300 ドルを支払い。

※改革派教会内で外国伝道のために捧げられた最も多額な個人献金であったため、当初はアメリカ国内での公表はなされなかった。

7. 神学校校舎の建築（1889年12月7日、伝道局宛のホーイの手紙）

※伝道局は絶えず資金難に苦しんでいた。

(1889年1月、宮城女学校校舎・寄宿舎、宣教師館2軒完成)。

「(もしも 1890 年の春までに、改革派教会が仙台神学校のために校舎を建築する適切な措置を講じない場合には、) 私は自費で必要な建物を建てることを提案いたします。…神学校の校舎はいま必要なのです。私はこの新しい建物を主に祈り求め続け、もしも必

要とあればその重荷を私に負わせて下さるように・・・願ひ求めて参りました。このような建物を建てることは私にとって大きな、大きな重荷になるに違いありません。しかし、私は主に祈ってきましたし、主のためならば苦難を少しも恐れません。」

※ 1890年3月20日伝道局からホーイ宛の電報「建築せよ、ただし助言を待て」

※伝道局からの条件

- ①経費総額が5,000ドルを越えないこと
- ②建物は伝道局の所有地か、オールド記念館（将来伝道局が名目だけの代価で買い上げることになっている）の土地に建てること

※『ホーイ伝』（100ページ）より

「この年（1890年）の夏、建築計画で多忙を極めていたホーイひとりを除いて、宣教師全員が仙台近郊の海浜（高山海岸）に集まっていた。・・・

ホーイは伝道局に対し、オールド記念館と仙台教会に残された僅かな土地を500ドルで買って、神学校へ寄贈したいと告げる。ただし、彼の名は伏せたままという条件であった。加えて、ドルの下落のため、建築費は当初の5,000ドルから7,500ドルに増大した。」

※ 1891年5月2日、伝道局宛のホーイの手紙

「私は神に祈ったものでした。何か他の人がすることもできず、しようもしないことをなさせて下さいますように、と。そして、この激しい戦いと重荷に満ちた五年の間に、私は神学校のために、少なくとも5,000ドルの献金を捧げるという無限の喜び（このこと自体は全く個人的なことですが）を味わってきました。」

8. 強盗事件（1897年9月30日『メッセンジャー』）

※「待ちに待った伝道局からの建築資金4,000ドルが送金されて、経理担当のホーイ家の金庫に収められたその夜、ある悲劇が起こった。それは何年もホーイ一人の胸に秘められ、彼一人の心と家計とを重く押し続けただけに、余計に悲劇的であった。事件から6年も後になって、ようやくホーイは自分の口で出来事の全容を明らかにした。」（『百年史』300ページ）

「1890年10月のある夜遅く、私は耳馴れた「郵便」という呼び声を玄関先で耳にしました。いつものことなので、何の危険も感ずることなしに、私は戸口まで参りました。するとそこに三人の覆面の男が立っていました。彼らはそれぞれ、ぞっとするような日本刀を私の顔と胸に間近く突き付けました。彼らは宣教師団金庫に案内せよと迫りました。・・・（金庫の）扉が開くやいなや、強盗どもは勝手に7,000円を取り出しました。一部分は校舎の建築費で、他は宣教師団の資金でした。男たちは私に危害を加えることなしに立ち去りました。そこで私は金庫の前に座り込み、何時間もそのままいました。・・・多くの思いが私の胸を横切りました。最後に私は声を挙げました、「主よ、この重荷を私

に負わせて下さい。伝道活動に差し支えることがあってはなりません。私が重荷を負います」。・・・」

※「伝道局は、最終的にはホーイが借り入れた金額に利息も添えて全額ホーイに払い返した。さらに付言するならば、この補償金はやがて中国に渡ったホーイの再出発の有力な資金となるのである。」(『百年史』302 ページ)

9. ホーイの個人的な出来事

1887 年 12 月 東京でメアリ・オールトと結婚

1889 年 6 月 第一子カール・ホイトマー誕生、鉗子出産のため死亡。

1890 年 8 月 第二子ウィリアム・エドウィン・ホーイ二世誕生

1893 年 10 月 『ジャパン・エヴァンジェリスト』の発行を開始。

※ホーイの中国転任後も 1925 年まで発行され、その後も

The Japan Christian Quarterly として継続されている。

1897 年 2 月 長町教会献堂式（夫妻は土地と日本家屋を購入し、改築費 350 ドルを献金）※ミセス・ホーイが 6 年前に日曜学校から開始

10. ホーイの辞任

(1) 健康問題

「ホーイは、仙台着任の直後から健康上の問題を感じていた。その主なる症状は発熱を伴う発作だったようで、最初の夏にはホーイはこの症状をマラリヤと思った。最初の住居は広瀬川のほとりに近く、したがって危険な蚊も発生しやすいと考えたからである。(11 月に南町 16 番地に転居) それでも病状が好転しないことから、ホーイは病因を日本式住居に求めた。寒くて湿気の多い日本の冬は、アメリカ式住宅の快適さに慣れた宣教師たちを大いに悩ますことになる。・・・

南町に移転して一年後、ホーイは片平丁 27 番地に移転するが、病状は一向に好転しないどころか、悪化の一途を辿るばかりだったため、すでに婚約していたメアリ・オールトが毎日訪ねては世話をし、ついにはシュワーツ医師がホーイの要請によって住み込んで、看護と投薬に当たらなければならないほどであった。・・・

1889 年になって、夫妻は新築された念願の西洋式住宅に移ることができたが、ホーイの病気は相変わらずであった。翌年の初めになって、ようやくホーイは自分の病気が実は重い喘息であることに気が付いた。発作は時として 10 時間も続き、睡眠不足が理由で、そのたびに何日も起き上がれない状態であった。同労の宣教師たちは治療法が転地以外にないとの結論に達した。

仙台神学校や宮城女学校の校舎および寄宿舎、教科内容の整備、日本の教会や同労者と

の折衝など、仙台における伝道の基礎を据える最も重要な時期を、ホーイはこの絶え間ない病苦との戦いの中で送ったのである。」(『百年史』442～444ページ)

(2) 高まる緊張と葛藤

①押川(=日本のナショナリズム)との関係⇒職務権限をめぐって

※当時、押川は院長、ホーイは理事局長、副院長

「良かれ悪しかれ、明治期日本のナショナリズムを代表する存在の一人がほかならぬ押川その人であった。「しばしば共に集まり、事態をめぐって討論を重ね、そのために祈りを合わせた」盟友、ホーイの乏しく薄い財布から捧げたすべての資産―土地も建物も一いっさいをその管理・運営に任せた兄弟押川、「日本で最も有能で雄弁な説教者の一人、その説教によってだれよりも多くの魂を揺り動かし、これを回心に導き、北日本の速やかな改宗の望みは彼に懸っている」として推挙を惜みせず、その名誉と功績を記念するために彼の名を付した校舎の建築を母教会の会員たちに提唱したその押川が、次第にホーイの目と心から遠い存在になりつつあったのである。」(『百年史』450～451ページ)

1893年11月21日 ホーイ、東北学院理事局へ辞職書を提出⇒理事局拒否

1894年9月15日 押川の院長辞任も含め、二人とも欠席のまま理事局を開催⇒押川の辞表を拒否、ホーイの辞表を受けることに決す。

1894年9月18・26・28日 ホーイの辞職の再考をめぐって理事局激論
⇒辞任は撤回(いずれも「東北学院理事局記録」より)

1899年10月28日 ホーイ、仙台を出発。中国での伝道を開始。

※ホーイの辞任日は、理事会資料欠損のため確認できない。

②宮城中会と在日宣教師団(ミッション)との関係⇒管理監督権をめぐって

「数年前、宮城中会は私たち在日宣教師団に対して、できるだけ多くの直接伝道を展開するようにと強く勧めました。(ところが)それから間もなく、この直接伝道活動のすべてを彼らの支配のもとに置こうとし始めました。折衝は2年にわたって続きました。昨年4月になって、私たちは、すべての直接伝道活動は在日宣教師団の統御のもとにあり続けなければならないと、最終的に通告しました。すると、中会は私たちとの協力をいっさい放棄して、独自の活動を組織すると宣言しました。・・・私がこのような世俗的な摩擦でどんなに疲れていることか、言い尽くすことはできません。最も苦痛なのは、嵐の中心の宮城中会で私自身に加えられる容赦のない攻撃です。」(1897年7月31日、伝道局宛のホーイの手紙)

※ホーイを攻撃する伝道者の中には、若い頃ホーイの物質的支援を受けた者も含まれていたことが、ホーイの失望と疎外感を大きくした。

「中会は、改革派教会からの伝道資金を原則的には前年（1897年）9月末日、遅くともこの年（1898年）の3月31日をもって全面的に謝絶し、自給独立を目指すことになる。・・・「中会施政権の確立」、この一語は日本側の悲願を表わして余りあろう。そして、それこそは明治期ナショナリズムの共通の心性であった。」（『百年史』458～459ページ）

(3) 中国伝道への献身

1894年 12月 ホーイ、賜暇帰米

1896年 5月 ホーイ、改革派教会全国総会に出席

中国伝道の最初の宣教師に推薦されたが、断った。

1896年 7月 ホーイ、帰着

1898年 4月 ホーイ、喘息治療を兼ねて中国視察（3ヵ月）

上海到着後、喘息からたちまち快復。

湖南省を中心に伝道を展開する方針を固めて帰国。

1898年 冬 ホーイ、喘息が悪化。在日宣教師団は転地の必要を決議。

1899年 9月 ホーイ、伝道局から中国出発の許可を得る。

1899年 10月 28日 ホーイ一家、仙台を出発。

「中国へ赴くという新しい目標を思う際に、私は日本の必要性が依然として存続することを忘れてはなりません。しかし、私が見聞し、学んだところから判断すると、日本に留まるよりは中国で新しい活動を開始する方が、残りの生涯をもっと有効にキリストのわざのために用いる道であると確信しています。」（ホーイの1898～1899年度年次報告より）

「日本におけるこの何年かは祝福と労苦とに満ちておりました。仙台は私の心に忘れがたい多くのものを与えてくれました。中国に対する責務へと私自身を向けるには、今に至るも激しい戦いと葛藤を抜きにしてではありません。しかし主は召しておられます。私は遅れておれないのです。・・・

私たちは長崎から乗船して上海へ向かったのですが、日本を最後に目にして、私の心はひどく痛みました。現地時間に合わせるため時計を1時間遅らせた時、私はこう思いました、「このように私は自分の人生を14年前に巻き戻し、そもそもの始めからやり直すのだ」と。」

【創立 40 周年】

「1925（大正 14）年秋、ホーイ夫妻は第 4 回目の、そして最後の賜暇帰米の旅から中国の任地へと戻った。帰途、立ち寄った仙台では、東北学院創立 40 周年記念と専門部校舎の完成の祝賀が盛大に挙行されていた。70 歳を越えていたもう一人の創立者押川方義も東京から参加したので、シュネーダーを加えた三校祖が期せずして、25 年ぶりで、そして最後に、顔と顔を会わせたことになる。・・・25 年にわたるホーイ夫妻の輝かしい成功は、彼らの「残りの生涯」がけっして無益ではなかったことを雄弁に物語っていた。25 年ぶりで一堂に会した三人の創立者たちの胸中を」去来したのは、どのような思いだったろうか。」

（『百年史』 466 ページ）

※ 1927（昭和 2）年 3 月 3 日

ホーイ、中国より帰米の途次、太平洋上の船中にて死去。

※ 1928（昭和 3）年 1 月 10 日

押川、東京にて死去。



東北学院の「草創時代」 —ホーイの貢献を中心に—

	東北学院関係事項	社会事項
※ ① 1885年 (明治18年) ③ ②	12月1日 ホーイ、来日(横浜着) 12月4日 押川、バラ宅でホーイに学校設立の協力を要請 12月8日 ホーイ、仙台視察。借家を契約。 12月21日 最初の宣教師会議開催、「在日宣教師団」を組織。	12月 太政官制廃止、内閣制度制定(伊藤博文内閣成立)
1886年 (明治19年) ④ ④ ⑤	1月2日 在日宣教師団、ホーイの仙台派遣を決定。 1月6日 在日宣教師団、仙台に神学校と女学校の設立を決定。 1月13日 ホーイ、仙台に着任 5月 仙台神学校、授業開始(1年間の経費をホーイが負担) 5月17・19日 押川、東京で新島と直接面談(学校設立の件) 6月1日 押川とホーイ、仙台で新島とデフォレストと会談 9月18日 宮城女学校設置認可(校主:押川、校長:ブルポー)	3月 帝国大学令公布 4月 師範学校令、小学校令、中学校令公布 5月 文部省、教科用図書検定条例公布 10月 宮城英学校(東華学校)開校 設置主:仙台区(市)長他、校長:新島
1887年 (明治20年) ⑨	4月 在日宣教師団、活動本拠を仙台に移すことを決定 5月 仙台教会と神学校を南町通りに移転 11月 (山形英学校開校、校主:県知事、校長:押川)(北越学館開校) 12月 シュネーダー夫妻来日。 ホーイ、東京でオールドと結婚	4月 第二高等中学校開校 4月 宮城女学校、東三番丁に校地取得(仙台神学校、その中の古い民家に一時移る) 12月 東北本線上野—仙台—塩釜間開通 12月 日本語訳『旧新約聖書』完訳なる
1888年 (明治21年) ⑥	1月 シュネーダー夫妻、仙台に着任(初めて鉄道を利用) 8月 ホーイ、仙台教会より敷地を購入。寄宿舎(ジョン・オールド記念館)を建築(学校として初めての建物)	5月 宮城女学校、校舎(二階は寄宿舎)建築着工(翌年4月完成)
1889年 (明治22年) ⑦	3月 押川、欧米視察のため仙台発(翌年5月、東京着)	2月 大日本帝国憲法発布 4月 仙台、市制施行
1890年 (明治23年) ⑧	9月 仙台教会より敷地を購入し、神学校校舎建築を開始 10月 ホーイ宅に強盗。校舎建築費他を盗まれる。	10月 「教育二関スル勅語」発布 11月 第一回帝国議会開会
1891年 (明治24年)	9月 「東北学院」設置認可、神学校校舎完成(山形英学校閉校)	1月 内村鑑三不敬事件(押川等、抗議) 2月 植村正久の『福音週報』発禁処分 6月 文部省、小学校祝日大祭日儀式規程を制定(「御影」に対する最敬礼、教育勅語奉読等の義務化) 11月 文部省、奉安殿(御真影、教育勅語謄本奉置)設置の訓令
1892年 (明治25年)	3月 (東華学校閉校) 3月 押川、労働会を創設 11月 東北学院開院式	2月 (宮城女学校ストライキ事件、相馬黒光等5名退学) ※日本精神を基調とした教育、学校の管理運営を日本人に委ねることを要求 9月 尚綱女学会(尚綱学院)創立

※①～⑩は、資料「東北学院の『草創時代』—W. E. ホーイの報告を中心に」の番号と符合

	東北学院関係事項	社会事項
1893年 (明治26年)	⑨ 10月 ホーイ、『ジャパン・エヴァンジェリスト』の発行を開始 ⑩ 11月 ホーイ、最初の辞任の意向を表わす (北越学館閉校) ※出村悌三郎、山川丙三郎等が東北学院に転校	8月 文部省、小学校祝祭歌制定 ※井上哲次郎『教育ト宗教ノ衝突』でキリスト教を批判
1894年 (明治27年)	⑩ 9月 ホーイの辞任届をめぐって理事局内部で紛糾 ⑩ 12月 ホーイ、賜暇帰米(明治29年7月帰着) 12月 押川、大日本海外教育会設立(会長:押川⇒後に大隈)	8月 日清戦争 (キリスト教界は戦争支持、戦勝祈願へ突き進む。他方、外国の宗教としてのキリスト教に対する圧迫・迫害も厳しさを増す。)
1895年 (明治28年)	1月 押川、朝鮮国視察のため仙台発(3月末、帰着) 10月 押川、北海道視察のため仙台発(11月中旬帰着)	
1896年 (明治29年)	1月 押川、北海道同志教育会設立(会長:押川) 4月 (大日本海外教育会による「京城学堂」開校) 6月 シュネーダー、賜暇帰米(明治31年5月帰着) ⑩ 7月 ホーイ、帰着 7月 押川、大日本海外教育会のため、しばしば上京 9月 島崎藤村、普通科教師として着任(明治30年6月辞任)	2月 カラゾルス不敬事件(第二高等学校にて) 4月 宮城女学校にて2回目のストライキ事件(教員1名退職、生徒11名退学) ※礼拝出席拒否、日本人校長による日本人に適した教育を要求) 6月 三陸大津波
1897年 (明治30年)	1月 ボール・ゲルハート、英文学教授として着任 3月 労働会を理事局の管理下に置くよう組織を変更 4月 (理事員会、学院構内での教職員の喫煙厳禁を決定)	
1898年 (明治31年)	⑩ 4月 ホーイ、喘息治療を兼ねて中国視察(3カ月滞在) 5月 シュネーダー、2年ぶりに帰着	3月 ロシア、清国から大連・旅順の租借権と南滿鉄道敷設権を獲得(中国の半植民地化が激化)
1899年 (明治32年)	8月～12月 押川、井深・本多らと山県首相・樺山文相らと折衝 (翌年4月 押川、井深・本多・植村・海老名らと片岡衆議院議長官舎にて会合。 ※片岡健吉は高知教会長老) ⑩ 10月 ホーイ、辞任(中国で伝道開始)	8月 文部省、私立学校令公布、訓令第十二号発令 ※ 国公立における一切の宗教教育・宗教的儀式の禁止。(条約改正実施により外国人の国内居留の自由が大幅に認められる「内地雑居」が始まる年であった。) ※ 生徒総数: 明治30年238名⇒明治33年161名に急減。
1900年 (明治33年)	8月 押川、中国滞在(明治34年4月まで)	3月 治安警察法公布 5月 北清事変(第一次出兵～明治34年9月)
1901年 (明治34年)	4月 押川、院長辞任。シュネーダー、院長に選任 5月 押川、東京へ去る。	

2015 年度

第 20 回 キリスト者教員研修会報告

第 20 回キリスト者教員研修会プログラム

日時：2016 年 1 月 15 日（金）14:00～19:30

場所：仙台国際ホテル 6 階 葵の間

総合司会 大学宗教主任 吉田 新

時間・会場	内 容
14:00～14:30	開会礼拝 <p style="text-align: right;">司会・説教 総合人文学科長 出村みや子</p> <p>讃美歌 234 A 番 聖書 マタイによる福音書 9 章 14～17 節 説教 祈 禱 讃美歌 544 番</p>
14:30～14:45	コーヒー・ブレイク
14:45～15:45	主 題「学内キリスト教活動の活性化」 <p style="text-align: right;">講師 宗教部長 野村 信</p>
15:45～17:00	自由討議 <p style="text-align: right;">司会 大学宗教主任 吉田 新</p> <p>発題をめぐって</p>
17:00～19:30	クリスチャン・フェローシップ <p style="text-align: right;">司会 大学宗教主任 吉田 新</p> <p>閉会</p>

【主 題】

「学内キリスト教活動の活性化」

大学宗教主任 野村 信

〔1〕学生たちのために

1、学内のキリスト教性(キリスト教的快活度・好感度)の向上

学生たちが、義務や強制ではなく、喜んで、楽しく、自発的に大学礼拝やキリスト教諸活動に参加し、行動することは出来ないのか。もちろん、最初は、多くの学生たちにとっては戸惑いと抵抗感があることは予想できる。だから、「背中の一押し」はある程度やむを得ないとしても、しばらくして「結構、楽しい!」とか、「意外に、良く分かる」という感想を抱いてもらうにはどうすれば良いのか。

2、「大学礼拝」にもっと積極的に出席してもらう工夫や取り組み

学生たちに、「大学礼拝は楽しい、興味深い、出席してよかった!」という感想をもってもらうにはどうすれば良いのか。もちろん、学生たちが単に喜ぶような、おもねるやり方は避けるとしても、何か良い心がけ、姿勢、工夫はないのか。

3、「キリスト教学」をもっと積極的に受講してもらう工夫や取り組み

学生たちに、「キリスト教学は楽しい、興味深い、受講してよかった!」という感想をもってもらうにはどうすれば良いのか。もちろん、学生たちに面白く、愉快的話題やプログラムを提供するやり方はあるかもしれないが、軽薄にならず、質を落とさず、単に喜ばす方法ではなく、何か良い心がけ、姿勢、工夫はないのか。(サンデル風森本流はあるが、もっとみんなで工夫し技術を学ぶ)

4、「大学内での諸活動」の活性化

実際、学生たちは本来、自分たちで造り出したもの、自発的に産み出したものを喜び、楽しむものである。例えば、ボランティア活動は、一旦始めれば、やりがいや面白さもあって、また参加しようと思う学生たちがいる。そのように学生たちは、自発的にサークル活動を行い、自分たちの手で作る楽しみを知っているので(あるいは大学でそれを体得できるので)、教職員は、そのための下支え、導き、助言をすることにもっと努力すべきではないだろうか。規制ばかりでなく、特に、キリスト教の精神から広がる取り組みや活動がもっとあっても良いと思うのだから。

5、小グループの活動が大切である。

講義の単位にはならないが、そのことの故に、かえって、小さなグループで、聖書を学んだり、読書会をしたり、文化活動をすることは学生たちのキリスト教活動にとって有効な方法と考えられる(青山学院の活動も参考になる)。そもそも、キリスト教史を振り返れば、リバイバル(信仰復興)は、「小グループ」や「家庭集会」のような、心が通う、小さなグループを核として生じたのである。そして、キリストが「二人または三人がわたしの名によって集まる所には、わたしもその中にいる(マタイ 18:20)」と言われたのであり、キリスト御自身もまた、12人の弟子たちをねんごろに育てたことを考えれば、大きな網を投げることも大切であろうが、人格と人格の交わりによって神の御心は広がっていくものではないか。グループ活動が決して強制でも、義務でもなく、楽しく、自発的になされたら良いものとなるだろう。

〔2〕教職員のために

1、キリスト教に対する教職員の好感度アップ

同様に、大学の教職員の皆さんに対しても、上記のような視点で接することはできないものか。すなわち、大学礼拝に一般の教職員が自発的に、喜んで出席できるような工夫や取り組みがあってもよいのではないか。そのためには、多少の工夫、アイデアを見つけないか。まだ実現していないが、特別伝道礼拝期間中に、聖書やキリスト教と関わることを一般の教職員の一人に話してもらうとか、何か、礼拝がもう少し、身近なものになる工夫を考えてみたいものだ。また「礼拝堂」そのものに親しみを感じる、足が向かいやすいという思いをもってもらうことも大切だろう。ぜひ、ランチ・タイムコンサートは、学生たちだけではなく、教職員の皆さんにも参加してもらえようというアイデアがあるといい。

2、教職員のための聖書の学び

以前、ある職員から言われたことであるが、女性のクリスチャンの先生が、女性の職員のための聖書の学び会を月に一度開き、聖書を説き明かしてくれて、その中で互いに語り合った、となつかしそうに話してくれたが、楽しかったらしい。やはり、何かしら教職員のための聖書の学び会があってもよいのではないか。

3、尊敬されるキリスト教

学院全体の教職員の皆さんから、尊敬され、大切にしたいと望まれるようなキリスト教活動と建学の精神であるには、どのようにしたら良いだろうか。長く奉職する教職員からキリスト教に「怨嗟」があるという言葉が聞かされると辛い。

〔3〕思想的な検討 プロテスタントの宣教の活性化一考

日本に最初にキリスト教が伝えられたのは、ローマ・カトリック教会のイエズス会からの宣教師たちの働きによる(1549年以後)。遠藤周作の『沈黙』に登場するポルトガルの宣教師ロドリゴの苦悩は、全くの虚構ではない。彼らは、日本に素手でやってきた。もちろん他の国々への対処の仕方は違う。軍隊が先に到着してから宣教師が渡来した地域もある。しかし16世紀に日本に来た宣教師たちは、純粋な動機で伝道した。たくさんの土産物、贈答品は持参したが、19世紀に浦賀に到来し、開国を迫った黒船は軍艦であった。この二つの宣教の違いは何かと言えば、宗派としては前者がカトリックで、後者はプロテスタントであった。

ここで、神学思想的に考えなければならない点がある。カトリック教会の世界に対する神学思想とプロテスタント教会のそれである。カトリックは、大陸の失地回復を理由に、航海技術の発達もあって、世界へ向かったが、しかし、「**この世界はどこも神の恵みの満ちた世界である**」と考えたので、宣教師たちは異国の地で死ねた。プロテスタントは、リバイバルに乗って、伝道の意欲や情熱から宣教するので、意欲の低下や、資金不足、結果が良くないと判断すると外国伝道が弱まる。そもそもプロテスタントの伝道力は経済的な進展に比例している。なお、プロテスタントは、その出発点に戻ると、「**聖書のみ**」、「**信仰のみ**」を強調するが、ルター派の教会にしても、カルヴァン派の教会にしても、全体的な視野を併せ持っている。中世1000年間に肥大化したヨーロッパの土壌の中で、このスローガンが大陸の中央で見事に新世紀を切り開く原動力になったが、日本に広がるプロテスタント教会には、この総合的な視野が希薄である。

なお、「**世界にあまねく神の祝福を観る**」という理解は、アニミズムや物神崇拝、神の偶像化といった危険を感じさせるが、このしくじりには陥らないように気をつけたい。聖書は、イエス・キリストの十字架と復活を中心として、世界全体は神の良き被造物と考えている。信仰をもって観る時に世界は新しく良いものとして把握される(マタイ5:45、ロマ1:20、1テモテ4:3他)。「置かれた場所で咲きなさい」

もう一つ光をあてるべき画期的なキリスト教の分野は、ロシアの正教会の復興である。とにかく彼らは「イコン」を持つ。イコンは、1、像ではないので十戒の第二戒に反しない、2、それを通して神を観る、と彼らは主張する。これは大切な視点を提供する。イコンそのものには賛同は出来ないが、宗教改革者たちは、「イコン」の役割は「聖書」が果たすと考えた。すなわち、「聖書のみ」というスローガンは、そもそも豊かなものである。果たして我々の中で、「聖書のみ」すら十分に把握されているのだろうか。

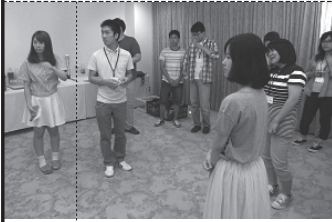


2015 年度

第 41 回 サマーカレッジ

2015年度 サマーカレッジ

宮城蔵王ロイヤルホテル

テーマ：「パウロと共に歩む ～古代から現代へ」

8月3日(月)	8月4日(火)	8月5日(水)
	7:00～ 朝食(各自、バイキング)	7:00～ 朝食(各自、バイキング) *各室フロントでチェックアウトを済ませ、荷物を持って集まること。 ～忘れ物のないように～
	9:00 朝の祈り 学生 長谷部雄太(総2)	9:00 朝の祈り 学生 三浦智宏(法2)
	9:30 うたおう♪ 学生 長谷部雄太(総2)	9:30 うたおう♪ 学生 長谷部雄太(総2)
	10:00 <講演 II > 「パウロと共に歩む ～古代から現代へ」 講師 吉田新先生	10:00 グループ討論
	11:30 グループ討議	10:45 グループ討論報告 アンケートの記入 11:30 閉会礼拝 吉田先生
	12:30 昼食	12:00 昼食
12:45 集合(土樋キャンパス 押川記念ホール)	1:30 体験学習 エール蔵王島川記念館見学	12:40 バス出発 土樋キャンパス正門前解散
1:00 <講演 I > 公開講演 「古代ローマとキリスト教」 講師 松本宣郎学長 司会 野村先生	3:30 レクリエーション 担当 市川文章(総2) 吉田桃子(法2) 福本菜生(営1) 野村先生・原田先生 吉田先生(DVD)	
2:45 東北学院博物館見学	フットサル、ソフトボール、 ソフトバレーボール、 DVD鑑賞など	
4:00 バスでホテルに移動	5:30 自由時間：入浴など	
5:00 閉会礼拝 学生 山田 保(総2) オリエンテーション(事務局)		
5:30 自由時間 各部屋および全体の親睦会		
6:00 夕食 担当 木皿実里(歴1) 佐藤なぎさ(総1)	6:00 夕食 担当 安垣佳麗(人1) 宮崎シオン(歴1)	
7:30 ディスカッション・アワー 3、4年生担当 奥山絵利花(歴4) 森 将徳(共3)	7:30 証と讃美の時 担当 庄司彩香(言2) 幕田菜月(言2) 鈴木祥子(言2) 長谷部雄太(総2) 野村先生・原田先生	
8:15 交わりとレクリエーション 担当 市川文章(総2) 長谷部雄太(総2) 伊藤彩花(言2) 佐藤 玲(歴1) 五十嵐朝海(人1) 幕田実香(地1)		
9:00 夕べの祈り (野村先生)	9:00 夕べの祈り (原田先生)	
9:30 解散 ☆	9:30 解散 ☆	

講演 I（公開講演）

「古代ローマとキリスト教」

学長 松本宣郎先生

（付記）本稿は、第 41 回サマー・カレッジにおける、本学学長の松本宣郎先生による公開講演の原稿の基本となった資料と解説です。公開講演それ自体は、カラーの多くの絵画や壁画のスライドから構成されていて、今回、その画像を本報告書の中で紹介するには頁数があまり多くなり過ぎるので、この原稿を提出していただきました。（宗教部長 野村記）

「ローマ帝国とキリスト教」

学長 松本 宣郎

1. 初期キリスト教徒の社会層

キリスト教徒はどの社会層に多く属していただろうか。

「キリスト教徒は人がしてほしいことはなさず、自分に仇なす者のために祈り、・・もたない者に与え、旅人を見たらもてなす。自分たちを兄弟と呼ぶが、それは肉による兄弟ではなく、聖霊と神における兄弟なのである」。(アリストティデス『護教論』15)

ーハドリアヌス帝に宛てた、と想定して記された文書。130年頃。

パウロは、1世紀に書いた文書の中で、あらゆる階層の人々に福音は開かれている、と記している。彼の関与した教会には、奴隷、極貧の人々もいた。改宗者の中には皇帝の解放奴隷もいた(“皇帝の家の人たち”フィリピ 4:22)。都市の上層に属すると思われる人々もいた。コリント市の会計掛エラストス、リュディアの富裕な婦人商人フィベなど。

キリスト教徒がのこした碑文がいくつか知られる、それらに登場する人間からその社会層を特定できる。

フリュギアの都市参事会員。agonothekeとして競技の費用を負担。

ビテュニアの都市公職者。3世紀。

法律家ガイウス某。250年頃。「貧しいがムーサイを愛し」、数の象徴を信じた人物。

エウメネイアの都市参事会員。

エウメネイアの Helix, アシアと布林ディシなど各地のレスリング競技で勝ち続けた人物。多くの都市の市民権を得、エウメネイアでも参事会員となり、gerousia (氏族会議)の一員にもなった。

以上は帝国の都市の最上層に属した人々。

ニコメディアの木彫師、フリュギア出身、3世紀。フリュギアの肉屋、オスティアの船主ギルドの一員(193年の碑文)。これらは中間層といえよう。

キリスト教徒と奴隷

基本的に著述を記したキリスト教徒は、奴隷所有者階級。

イグナティオス：アジアの教会が、教会の資金で奴隷を解放するよう提案したことを叱責している。「ポリュカルポスへ」4。

キリスト教徒が自分の奴隷の信仰に手こずった証言がいくつかある。

Tertullianus : ある教徒の奴隷が、皇帝の何かの祝いの時に、家に勝手に飾り付けをした。
Idol.!5.

スペイン、エルヴィラの公会議(320年)カノンに、「奴隷が家内で偶像崇拜することを禁じよ、しかし反抗しそうならそのまま信じさせよ」、とある。

これらに見る教会著述家や会議体に、自分たちの異教徒奴隷を改宗させようとする意向は見られない。

大衆・貧民キリスト教徒

商人など、中産階級キリスト教徒は余り見いだせない。全体的に見て、キリスト教には若干の富者教徒がおり、他の多数は大衆だったと思われる。これはローマ社会全体の社会層の配置を映す鏡といえよう。ただ、奴隷キリスト教徒は社会に占める奴隷数の割合に比して、教会内では小さかったと想像される。

パウロ「賢い者、強い者、貴い者は多くはない。神は世の愚かな者を選ばれた」。

Celsus : 教徒は下層民、無学な者、女性ばかり、と侮蔑的に語る。2世紀。

Tertullianus : 下層民が多いことを前提。彼らは魂について、粗野で本能的自然的に聖書を解釈する、と。

Minucius Felix, *Octavius*. 230年頃。キリスト教徒 Octavius と、北アフリカの異教徒上層民 Caecilius との、キケロー風対話編。Caecilius はキリスト教徒は社会の最下層の人々、熱狂的な女たちの集まりだ、ときめつける。Octavius も反論できない。「我らのほとんどの者は貧しい民と見なされている」。

Clement of Alexandria : 教会には、単純な信心の大衆と、知的な信仰を求める少数の教徒が併存していたことを証言する。3世紀。

上層民キリスト教徒

Clement of Alexandria : 『富者はいかにして救われるか?』イエスの譬え(富者が天国に入るのより、らくだが針の穴を通る方がたやすい・・・)を比喩的に解釈。富自体はよいもので、教会に献金し、貧者に施せば、金持ちはその罪を軽くすることができる、と。

Tertullianus : 200年頃のカルタゴで、上層民キリスト教徒であるが故に生ずる問題を論じている。*de idol.*,17-18. 女性がぜいたくな化粧や装身具に夢中になる。都市の公職を担うキリスト教徒が直面する、偶像崇拜などの問題。この種の問題は、最近教会に生じたことだ、と言う。

Celsus も、これら公務を信仰故に拒むキリスト教徒を非難。下層民が多い、との彼の主張に矛盾するが。

Julius Africanus. 160 - 240. イエルサレム生まれ。シリア人?エマウス市居住。市を代

表してローマに使節として派遣され、エラガバルス帝に請願。エマウス市をニコポリスと改称したいと願い出る。キリスト教徒として聖書を研究。オリゲネスと文通。旧約外典「スザンナ物語」は偽書であることを証明。ローマ市でパンテオンに図書館を設置する事業に従事したことが知られる。

180年代、ローマに小アジア出身の皮革行商人 Theodotos が率いる小グループがあり、ユークリッド、アリストテレス、ガレノスを尊び、特にガレノスを崇拜していた。ローマ司教により異端として破門された。

オクシュリンコスの Hermogenes 某。3世紀半ば。都市上層民。Africanus の書物を所蔵していた。

女性キリスト教徒

ローマ司教 Callistus。2世紀末。キリスト教徒女性が教徒男性と同棲することを承認した。上級身分女性キリスト教徒が平民や解放奴隷、奴隷と結婚すると身分が夫と同じとなり、自由民の身分を失ってしまう、というローマ法の規定から守る便法だったらしい。

Tertullian., スペインの公会議決定、などにキリスト教会に女性が男性の数をしのぎ、多数であったことを示す記述が見いだされる。

上層民キリスト教徒は実際には女性の方が多かったと思われる。

303年、キルタに迫害が生じ、役人が教会を接収したとき、発見されたのは男性用トウニカ 16 に対し女性用ヴェール 38、トウニカ 82

2. 初期キリスト教と言語

キリスト教会には帝国国境外の、ことに外国語世界に向かう、という姿勢がまだ見られない。ギリシア語偏重は明らか。

Ulpianus (3世紀):ローマ法の下で、帝国民はその法がたとえギリシア語、ラテン語、フェニキア語、ケルト語、などどんな言語で編まれていたとしてもそれを守る、と。

これはローマ人法律家の理念。すでにラテン語は帝国の公用語。支配者の言語として圧倒的存在であり、非ラテン人、すなわち属州民族は否応なくラテン語を習得していた。キリスト教は意図的にギリシア語を守り、ラテン語世界の教会でもギリシア語礼典を維持しようとした。ラテン語が用いられるのは3世紀から。

Ulfilas、自分の親がゴート人の捕虜となり、ゴート人と交わり、ゴート語アルファベットを作成、旧新約をゴート語訳(列王記を除く)。福音書の一部が写本として現存。

4世紀以後修道士が様々な言語訳を行う。

教父 Theodosios (アンティオキア)は、自分の教会には常に4カ国語(ギリシア・アルメニア・ベッシ他)で讃美を歌う人々がいる、と。しかし典礼はギリシア語。

4世紀にキリスト教は田園に広がったから、多くの言語民族を抱えることになったはず。しかし都市の司教は相変わらず「蛮族語」を蔑視。Johannes Chrysostomus すら同様。彼の

聴衆にはゴート語、アラム語話者がいたはずだが。

3. 都市と田園のキリスト教徒

3世紀半ばまで、キリスト教は都市に集中。これはローマ帝国社会がそもそも都市中心のシステムになっていたことから当然ではあった。田園散村に積極的伝道は行われなかった。田園居住の市民が都市でキリスト教に触れ、信者になることも少しはあったろう。だから徐々に田園の教会も生まれていったと想像は出来る。2世紀に生じる迫害は都市においてであった。そのために田園に難を逃れる信者や、都市から追放される信者は増えたらう。田園教会の成長も見られたことになる。

この間キリスト教全体が都市間で連絡し、会議など開くほどになってゆくが、都市上位、都市中心の組織、という状況は不変だった。

2世紀には教徒の数も徐々に増加した。伝道は最初期から一貫して行われ、キリスト教の本来の使命と感じられていたから、都市を越えて伝道は田園にも及ぶようになった。また、都市における迫害が、散発的ではあれ多くなるにつれて、都市の迫害を逃れて田園に移り住むキリスト教徒もあったらう。帝国都市の当局には都市内でのキリスト教徒迫害には対応しても、田園まで追及の手を伸ばす意図は全くなかったからである。

キリスト教の中では分派の運動も目立ってくる。正統を首唱する中心都市、ローマ、アンティオキア、カルタゴ、アレクサンドリアなどの教会で、多くの分派グループに異端の評価が下され、論争が生まれる。2世紀半ば、アジアでモンタノスという人物が興した熱狂的な神の国到来をうたう運動が異端と見なされた。彼の周辺に多数の信者が集まった。

3世紀になって田園へのキリスト教の進出は顕著となった。田園の教会も多くなったであろう。次第に地域ごとに言語や民族、文化の違いから、教会の地域的特性というものも生じてきた。それはたとえばアレクサンドリアとローマの大都市の教会間においても生じたことであった。こうして東のシリアから西のスペインまでの教会が一カ所に集まって会議を行うことが頻繁になった。教義や聖書本文の統一、教会役職と秩序、あるいは迫害への対策、等が議せられた。キリスト教全体におけるこのような意識は、その後のキリスト教の歴史上きわめて重要であった。

この過程で、異端の認定、信奉者の処断、などと共に出てくるのが、都市教会の田園教会に対する差別感であったように思われる。モンタノス派の例もあり、都市大教会指導者は田園教会と異端と結びつきやすいという認識をもっていたのである。3世紀アレクサンドリア教会の司教ディオニュシオスがナイル沿岸農村キリスト教徒の異端的傾向を矯正するために働いたという話をエウセビオスが伝えている。

都市と田園との対照的關係は、4世紀以後も意識された。禁欲修道士たちの荒野志向は、都市教会の世俗化に反発した修道士が素朴な田園を理想化して移り住む、という、それまでの逆の価値判断が生まれたことを意味したかも知れない。

修道士シメオンの逸話を紹介する。510年頃、エウフラテス西岸、山村のクラウディアス

におもむく。村を歩いているとき羊飼いと話す。彼らは聖書をまだ知らなかった。親から聞いたことはある。子供が生まれたとき教会に連れて行って洗礼を授けてもらったが、行ったのはその時だけ。シメオンは村に廃屋となった教会を見つけ、そこで説教する。地獄について語り、村人が教会に行かなくなった理由を訊く。ヤギの世話が忙しくて、との返事。彼は親をだまして、子供 90 人を教会に引き取り監禁。髪の毛を剃り、修道士のように仕立てる。取り戻そうとした親二人が突然死に、村人はシメオンに従う。子供に聖書を教え、そこで 26 年伝道した。

4. キリスト教徒と一般社会

3 世紀。ローマ帝国世界にギリシア神話は健在。帝国住民は自分たちが神々を信じる敬虔な民である、との認識をもっていた。

e.g. Et nos religiosi sumus et simplex est religio nostra. *Passio SS. Scillianorum* 3.

2 世紀末か 3 世紀初、アフリカでの迫害の時、総督の言葉。ローマ帝国一般都市民とキリスト教徒の間での宗教意識に大きな違いはなかった、ということ。むしろキリスト教徒の方が頑なであった。一般市民の認識として、キリスト教徒は神々崇敬を拒否するもの、と見なさざるを得なかったのである。

キリスト教徒は、霊に捕らわれてばかりいたのでも、常に殉教者を出し続けたのでもない。彼らは世俗の生活をしていて、すべての住民が顔見知りのような町で、キリスト教徒であることは秘密ではなかった。彼らは自宅に近隣の女性や子どもを招いて福音を伝えた。

キリスト教徒のいやしとエクソルシズムも実行され、ある程度その効果は認識された。

しかし、キリスト教徒が伝道にそれほど熱心であったと思えないふしもある。オリゲネスは、洗礼志望者は 2, 3 年は待たなければならなかった、と言う。『ケルソス』 3.51ff.

ヒッポリュトス『使徒伝承』 15, 17, 18. 洗礼志望者に、食物規定遵守、罪の悔い改め、断食、エクソルシズム、がていねいに課される。入信者はかなり鍛えられていた。急速に、奇跡などによって大量の洗礼者が出る、などという例はあまりない。そのような場合は、すぐに人々は教会から離れたろう。

従ってキリスト教徒の数はあまり増えなかった。

ケルソスやルキアノスが蔑むほど、キリスト教徒の群れは定見なく、単純素朴で支配されやすかったのか？それは事実ではあるまい。キリスト教会は強力なカリスマ的リーダーを備えなかったし、ある時点からは現実的で冷静な終身リーダー、司教をおいた。

政治的・経済的エリートが大きい役割を果すシステムをとらなかった。

社会的な問題については、改革的ではなかった。社会の身分、権力はそのままとした。

ローマ帝国都市の、エヴェルジェティズムを実行する階層にとって、キリスト教会は魅力をもたなかったろう。

ギリシア・ラテン語の文学教師などのインテリ層も引きつけられることはなかった。

キリスト教に引きつけられたのは、都市における富と権力の誇示や、社会の格差拡大を快

く思わない人々、下層民・貧民だったろう。

キリスト教のローマ帝国における拡大は、ローマ帝国・地中海世界の大きな変化の動きと社会的変動に負うところが大きい。

都市市民内部の集約性がゆるみつつあった。ことに都市固有の神々信仰受け入れない人々が増えてきていた。移住者が増しており、彼らが市民権を与えられる機会は大きくならなかったから。

共同体的な、平等の意識、が弱まった。ローマ市民権の政治的な価値は減少した。

平民市民は *humiliores* として、差別されるようになった。

303年大迫害時の「フィレアスの殉教伝」：エジプト総督クルキアヌスのことば

「おまえが貧乏人 *indigere* / (または) 田舎者 *agroikous* なら、余も見逃しはせぬ。だがおまえは、このように財産持ちで、都市すら富ませる力をもっている。それを理由として、自由の身をいとい、祭儀するがよい」

キリスト教徒の間の「愛の教え」は異教徒社会の目には価値あるものとは映らなかった。教徒が強調した「謙遜さ」という徳も、異教徒社会ではよい概念ではなかった。

「卑しさ」という概念も同様。神の子であるキリストが、身分の低い、卑しい庶民と共にいる、彼らのために奉仕する、というキリスト教における、イエスの尊ばれるべき態度は、異教徒、ことにストア哲学者などにとってはいかがわしい考えであった。

福音書にしばしば現れる、極貧の人々への同情の念、あるいは理念的に理想化された貧民、という考えも、異教徒には異常、と映った。

5. ローマ帝国の哲学・思潮とキリスト教

2～3世紀のローマ帝国都市では、哲学が神々に接近し始めていた。五賢帝の時代後半は疫病、ゲルマン民族侵入などにより、帝国社会全体に不安の念が広がった。

ルキアノスやガレノスはこの時代風潮を反映。

キリスト教徒の中にも、自分たちの唯一の神をプラトンの哲学で説明する者が現れた。ユスティノス、タティアノスは、ルキアノスらにむしろ近かったが、哲学からキリスト教に向かった。キリスト教信仰を理想化し、確信的に論じた。

この、「不安の時代」の思想家の中でキリスト教教父が唯一晴朗で自信をもっている。一種のオプティミズムが支配。キリストの贖罪による救いを確信。

終末にむしろ期待している。復活を確信。禁欲を逃避的でなく、救済史的に解釈。

6. キリスト教と禁欲・性の問題

禁欲は教会においてはごく自然にあった。信者間で興味共感を抱かれる。信仰歴や知的能力、社会的地位、性・年齢とかかわりなく実行できた。教会的権威が不要。

禁欲者の伝記が書かれ始める。真実性や著者などは無視。勝手に預言者、使徒等の名を冠

する。信仰的・正統的文書もあったが(「パウロとテクラ行伝」「ポリュカルポス殉教伝」、偽典、異端文書とされるものが多い。

性的欲望は、教会では人間の罪と結びつけられた。だれにも問題は多く、信者の生活の多くの部分を占めた。結婚・離婚・再婚・夫婦の性行為・避妊・墮胎・同性愛、血縁の限度、女性の地位、性の忌避、等々。

ホモ・セクシュアルは多くの社会で許容、ないし評価されていた。ギリシア人の間ではとくに日常的であった。ローマ帝国アフリカ属州でも広く見られた。2世紀のアプレイウス(『変身物語』)の『弁明』に、自分の正当性を示すために少年愛を行っていると言明する場面が出てくる。アルテミドロス(『夢判断の書』)は不自然な性の規定を行っている。レスビアンは不自然だが、ホモはそうでない。

マルクス・アウレリウス『自省録』1.16,17:若いときに、男とも女とも性的接触をもたなかったことを(神に)感謝している。どちらの接触が悪いのか、言及していない。

ギリシア・ローマ社会共通に男娼は忌避された。

アテネでは、男で身体を売っている者が民会に出ることを罰したといわれる。

古ローマでは市民間のホモ行為を禁じる法があった、とキリスト教教父が言う。実在は確認できない。

共和政末期、ローマ人の中でホモ・セクシュアルの流行が見られ、保守的ローマ人はこれを「ギリシア人の愛」と呼んだ。次第にローマ市民と奴隷、外国人のホモ関係は許容される(カエサル)。しかし上層の間では、ホモの実行は揶揄、攻撃の理由とされた。アウグストゥス以後の諸皇帝について、真偽のほどはともかくホモ行為をからかわれ、非難される例多い。

しかし、ローマ社会を性的紊乱が支配していた、と考えるなら誤り。Dio Chrysostomus, Marcus Aurelius を想起せよ。アルテミドロスも、「町の売春宿に出入りする連中は恥をかき、浪費している」、と。このように、ギリシア人の間では、性を名誉と恥の観念が抑制。これを保つのが *aidos* (穏和)、破るのが *hubris*。

アウグストゥスの風俗矯正諸法の影は大きかった。その効果あり、3世紀の諸皇帝は、「我らが時代の貞潔さがゆえに・・・」などと言い得た(*Cod.Theod.9.9.9. 224C.E.*)。

このように多神教においても性の禁忌はあった。神殿での礼拝前の性交を控えさせる、など。妻以外の女性との交渉への禁忌の度合いが強い。しかし、多神教のこの禁忌は、時間限定的。継続的禁欲が少なくとも神官以外に求められることはなかった。

巫女が処女たるべきこと、という事例はある。2世紀シリアのある巫女は、神の命令で20年パンを断ち、処女を守り、100年生きた、と。マケドニア；アレクサンドラという女性の墓碑。アルテミス神の指示で27年処女を守り、結婚、8ヶ月で死ぬ。

ローマのウェスタの巫女。30年巫女として仕え、のち結婚した例も。

キリスト教徒の性規範

ユダヤ教の性観念を受け継いだ。

キリスト教教父はギリシア・ローマ社会の墮胎(子殺し)・子捨てをはげしく批判。姦淫を

も忌避。

多子は財産分割が慣行の社会では深刻な事態を招く。従って旧約聖書において墮胎への言及は微妙。母体を傷つける墮胎が禁じられる、あるいは胎児の月数が問題とされる、など。近親婚については、初期はどれほどの批判は見られず、4世紀に非常に厳しい姿勢が現れる(アンティオキア教会会議カノン 10,11,18,20)。

キリスト教会が近親婚を嫌う理由はあった。この時代、女性が未亡人になったら亡夫の兄弟と再婚させられる可能性が大きかった。キリスト教徒女性について、教会はそのような再婚を禁じるようになった。320年、教会カノンで、生涯破門とされた。

ホモへの忌避の念は強かった。ユダヤ教が強硬だった。パウロも。ユダヤ教がこの種のことに頑なだったのは、少数民族として種を保存することが至上の倫理であったため、とよく説明される。マスタベーション(オナニー)が死に価する、という説話。

キリスト教は離婚・再婚をも嫌ったが、このことはユダヤ教にもない姿勢で、キリスト教が古代世界で初めてとあってよい。

7. 幻と預言

初期キリスト教徒にとって、天使は身近な存在。

預言者は高い地位にあった。「ディダケ」13：訪問する予言者。

幻はキリスト教史を通じて信じられる。現代のカトリック教会において、30回以上のマリヤ顕現が記録されている。スペイン、旧ユーゴ、などに。

ギリシア人、ローマ人にとっても、幻はごく当たり前のこと。神話的性格が強い。

イエスに関わる幻は、洗礼の時、山上の変貌、など。見た者の反応、狼狽、何か建物を建てるなどの感覚を刺激、等は異教徒も共通。

「ヘルマスの牧者」

使徒教父文書。1世紀末成立？預言と幻の書。著者はローマ教会の一員(解放奴隷)と思われる。「ローマの信徒への手紙」16:4に出るヘルマス？

ローデという富裕な女性の奴隷であった。イタリアのクーマエでトランス状態に陥り、幻を見る、という設定。ヘルマスはキリスト教徒ではあるが、ローデの裸身を見てそれに惹かれ、この世的なつまづきも犯す人物。

幻には、白髪・白服の婦人が現れ、ヘルマスの罪として、家族に信仰がないことを指摘。4人の若者が婦人を空中に持ち上げ、東へと運び去る。アルテミドロス『夢判断の書』によると、神が東へゆく夢は幸運のしるし(2.35.1)。

次のトランス状態。婦人は、ヘルマスに人々に伝えることを聞かせる、という。ヘルマスが覚えられないと言うと、本が与えられる。読む前に15日間の祈りと断食。

家族を訓練すること、妻とは、将来姉妹のごとくにくらすこと、が求められる。

禁欲が大切。キリスト教徒の罪は、一回だけ悔い改めが赦される。心を純なものとしなくてはならない。

この婦人は、ヘルマスが考えていたようなシビュラの巫女ではなく、「教会」である、と若者に教えられる。彼女は天地創造の時に生まれたのでこんなに老いているのだ、と。

婦人はヘルマスに手紙を渡し、クレメンスとグラプテーのところへ運び、都市にある教会の長老たちの前で読み、と。グラプテーは、やもめ、孤児の教師、とされる。クレメンスが司教か否か不明。これがヘルマス時代のローマ教会だとしたら、1人司教体制ではないことになる。

次に婦人は、彼を美しい野に連れて行き、象牙の椅子を見せ、座れと命じる。ヘルマスは、椅子は長老のためのものだ、と固辞する。婦人は、左に無理矢理座らせ、右の椅子は殉教者のためのものだ、と告げる。ローマの迫害を暗示。

教会の指導層は、幻・聖霊顕現に次第に警戒的となる。パウロやペテロ、マリアの体験に限定させようとしたようだ。幻視者の個性は評価されない。ペトロが魔術師シモンと対決し、彼を否定した理由が、夢・幻に頼る愚かさ(Ps.Clement)。オリゲネスは、パウロの見た夢を強調したりするが、総じて護教家・教父には、信仰者の倫理性の方が重要で、それが高い信者の幻ならばよしとする傾向。

異端は夢・幻、それを視る賜物を持つ者を評価。モンタノスの例。400年ころのアフリカ。ある人々が過去の殉教者の夢を見た、として記念建造物を建てる運動を起こすが、司教会議で破壊決定(カルタゴ会議 Canon)。

8. 迫害と殉教

初期キリスト教において殉教者の地位は高かった。その徳は天において普通の信者の100倍とか、殉教は第二の洗礼である、とか。殉教者には他の信者の罪をぬぐう力がある、とか。

初期の殉教者の絶対数は多くはなかった。1928~48にかけて、信仰のために死んだキリスト教徒の数は、初期3世紀間の全殉教者数より多かった(K.T.Ware,1980)。

しかし殉教者についての観念、殉教者伝と彼らへの尊敬の念の表現は近代カトリックにいたるまで同じ。850年、イスラーム支配時代のコルドヴァで50人のキリスト教徒が処刑された。その殉教伝の書き方は、2世紀ルグドヌム、カルタゴの記録と同じ。牢獄で祈る、熱心に殉教を願う者、先に死ぬ者が後の者を勇気づける、冷淡な裁判官、殉教者には良家の子女が多い、拷問され解放された女性への讃美、etc.

初期キリスト教徒の殉教は、ローマ帝国都市の公的行事・パフォーマンスと不可分の関係にされた。

イグナティオスーローマのコロセウムで処刑された可能性はある。

ポリュカルポスースミルナで公開火刑。

ルグドヌムの殉教者ーアリーナで野獣、剣闘士競技に供された。

ペルペトゥアーカルタゴで、同じ体験。

都市民衆は無慈悲にキリスト教徒の血を喜ぶ。ペルペトゥアらの流れる血を見て、「よく洗ってやれ！」と揶揄。これは都市の公共浴場で聞かれた言葉。ときに教徒への同情の言葉も聞こえるが、反感で不評とかが高じて処刑がやめさせられた、という話はない。

ローマ帝国都市民のキリスト教徒への憎悪はそれほど深かったのか？

彼らは、歴史上もっとも残酷な民族だったのか？

これらは一部分真実であっても、すべてを言い当てているわけではない。

都市アリーナでのパフォーマンスの、社会構造的な位置、を考えるべき。

3世紀半ばまで、禁止法を理由とした皇帝による迫害はなかった。

むしろ皇帝はキリスト教徒を守ろうとさえしている。

トラヤヌス、110年ころ、匿名によるキリスト教徒告発を禁止。ハドリアヌスも、アジアの属州会議にこの原則を確認。

迫害の法的根拠探しにこだわるべきではない。

告発理由は殉教伝ではあまり明白でない。しかし都市の民衆、エリート、総督の中にキリスト教徒に悪意を抱いていた者がいたことは明らか。

64年、ローマの「ネロの迫害」では、キリスト教徒が道徳的破廉恥行為を行っているという風評が背景となった。財産をねらわれた(メリトン)、百人隊長の地位をねたまれた(マリノス)。エウセビオス『教会史』7.15.2)、哲学者の名声をねたまれた(ユスティノス)、など。しかしこれらは二次的理由とすべき。

「無神論」という、キリスト教徒に向けられた非難は重要。

ローマ帝国の人間は、基本的に神々礼拝を実行、神々の存在を否定しない。

キリスト教徒のこれら神々の非難、あるいは無視する発言や振る舞い、は挑戦的で非礼な行為。

ローマ帝国社会は、神々への崇敬を祭儀・祭典で表し、それが十分でなければ神々の怒り＝災厄を招く、と信じていた。かなりのインテリローマ人でも同様。キケロー、マルクス・アウレリウス、等。

初期キリスト教徒への迫害の背景には、このような多神教神観念が社会の上から下まで確立していたことがある。

キリスト教徒が告発された理由は？

災害などにより都市の安全が脅かされる時、市民挙げての神託伺いと祭儀が行われる。これに参与しないキリスト教徒の存在が明らかになる。あるいはキリスト教徒への中傷が増大する。通例は黙認されているキリスト教徒の不可解、不愉快な行為への潜在的な敵意、恐怖感、不快感、があった。

これとは逆に、177年のルグドヌムでは、皇帝礼拝の祭典が近づき、例年以上の盛り上がり期待されていた。祭典のショーで犠牲となる人間に、キリスト教徒が用いられた。

都市市民の目的は、時にはキリスト教徒の死でありえた。

しかし裁判官はそうではなく、出来るだけ被告キリスト教徒に罪を晴らせようと努力。

裁判官が特に気を遣うのは、担当属州都市社会の平穩 *salus publica* の維持。

ところが、被告が裁判官の言うことをきかない。時に挑発的、熱狂的になる。

裁判官は、このような状況で、キリスト教徒を釈放するような措置は市民をさらに怒らせ、暴動を招きかねないと判断し、キリスト教徒の処刑を命じたことも十分考えられる。

2世紀の裁判官は、ほとんどの場合属州総督(ローマにおいては、首都長官 *praefectus urbi*)、彼らがキリスト教徒について抱いていたイメージは明確。帝国に忠誠でない、反社会的陰謀を企てているかも知れない、その迷信を都市民に宣伝し、汚染させようとしている、熱狂的で反動的、その迷信にかたくなに固執、性的な乱れ、幼児を食する風習、魔法を使うとの噂、いかがわしい儀式、皇帝が禁じた結社徒党を構成する疑い、男女の規範を無視、奴隷に主人への反抗を教唆、神々と皇帝の像をただの木石と嘲弄、無神論の徒輩、等。

裁判官たちは、キリスト教徒はキリスト教徒だから死刑を科されるに値すると答えたろう。

参考文献

松本宣郎 『ガリラヤからローマへー地中海世界をかえたキリスト教徒ー』山川出版社

1994年

『キリスト教徒が生きたローマ帝国』日本基督教団出版局 2006年

『キリスト教の歴史』1〈宗教の世界史8〉山川出版社 2009年

R. スターク 穂田信子訳『キリスト教とローマ帝国ー小さなメシア運動が帝国に広がった理由ー』新教出版社 2014年(松本による解説付き)

講演Ⅱ

「パウロと共に歩む～古代から現代へ」

大学宗教主任 吉田新先生

「パウロと共に歩む ～ 古代から現代へ」

大学宗教主任 吉田 新

「魔女のばーちゃんにサリマン先生の犬とは…、わが家族はややこしいものばかりだな。」
スタジオジブリの『ハウルの動く城』（宮崎駿監督 2004 年）のなかで、ハウルが語るセリフです。

ハウルの動く城には、複雑な事情を抱えている人たちが一緒に生活し、一つの食卓を囲んでいます。かつて、ハウルの心臓をねらっていた荒地の魔女。いまは魔力を奪われ、疲れきった老女になり、ソフィーから食事を食べさせてもらっています。ハウルの弟子の少年マルクル。かつてハウルの先生でしたが、いまはハウルとは対立関係にあるサリマン先生の飼い犬ヒンもいます。複雑な呪いがかかったカブ頭のカブ、そして、これまた呪いをかけられて老女になったソフィーがいます。ハウルの動く城の中は異なった人たち、それも対立していた人々たちが、互いの事情をそのまま受け入れて一緒にいる場所です。ハウルの城は、異なる者たちをまるごと抱え込みながら進んでいきます。

しかし、ハウルの城の外はどうでしょうか。戦争が止まない世界、つまり、異なる者をまるごと排除し、殺し合う世界です。「いよいよ決戦だぞ！ 今度こそ叩きのめしてやる！」とサリマン先生が仕える王は息巻くのです。

よく見ると、ハウルの城の中の住人たちは、外の世界に否定された人ばかりです。呪いのため自分の住みなれた家に居場所がなくなったソフィー、そして、魔力がない荒地の魔女には用はありません。いわば、ハウルの城は排除された者たちの城でもあります。映画『ハウルの動く城』は、目指すべき共同体とは何かを考える作品だと思います。そこで大切なのは、わたしたちはハウルの城の外にいるのか、または中にいるのか、という問いです。

聖書にも、人間が目指すべき共同体について考えた言葉を見つけることができます。パウロの手紙に次のような箇所があります。少し長いですが、引用します。パウロは自分が伝道した教会(共同体)の人々に宛てて述べています(コリントの信徒への手紙1 12章14-26節)。

体は、一つの部分ではなく、多くの部分から成っています。足が、「わたしは手ではないから、体の一部ではない」と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか。耳が、「わ

たしは目ではないから、体の一部ではない」と言ったところで、体の一部でなくなるのでしょうか。もし体全体が目だったら、どこで聞きますか。もし全体が耳だったら、どこでおいをかぎますか。そこで神は、御自分の望みのままに、体に一つ一つの部分を置かれたのです。すべてが一つの部分になってしまったら、どこに体というものがあるでしょう。だから、多くの部分があっても、一つの体なのです。目が手に向かって「お前は要らない」とは言えず、また、頭が足に向かって「お前たちは要らない」とも言えません。

ここでパウロは、人間の体の器官のたとえを用いて、共同体のあり方を説いています。目、耳、手など、それぞれの器官は別な働きをしているが、そのひとつひとつの存在は大切で、反目しているように見えて、実はお互いを必要としていると説明しています。

それどころか、体の中でほかよりも弱く見える部分が、かえって必要なのです。わたしたちは、体の中でほかよりも恰好が悪いと思われる部分を覆って、もっと恰好よくしようとし、見苦しい部分をもっと見栄えよくしようとしめます。見栄えのよい部分には、そうする必要はありません。神は、見劣りのする部分をいっそう引き立たせて、体を組み立てられました。それで、体に分裂が起こらず、各部分が互いに配慮し合っています。一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶのです。

このように語っているパウロ自身、彼が中心となって作った教会(共同体)をどのように形成するべきか、悩んでいたと思います。この手紙の宛先であるコリントという街は、当時、商業上の要地であり、ローマ帝国において重要な街でした。そこは、さまざまな民族、宗教が入り乱れる多文化混合の場でした。そのため、パウロたちが作った教会にもいろいろな背景をもった人が集まっていたはずで、そのような人たちをひとつにまとめるのは容易ではありません。事実、パウロがコリントの教会に宛てたこの手紙は、手紙の最初から共同体の内部の不和にやきもきするパウロの心情が語られています。

自分とは異なる人と一緒に生活したり、仕事をしたりするのは本当に大変です。その人たちを排除して、自分と近い人や自分の意見に反対しない人たちだけを残すのは実に簡単です。しかし、パウロは問いかけます。不必要と思われる部分が実はとても大切な役割を果たすのではないかと。

異なる者たちをまるごと抱え込んだハウルの動く城は、最後、ぼろぼろになって、板一枚になりながらも歩き続けます。わたしたちが求める共同体の道は険しいものかもしれませんが、だからこそ、目指すべきなのかもしれません。

2015 年度

第 38 回 青山学院大学・東北学院大学合同チャプレン会議報告

（付記）青山学院大学と東北学院大学は同じ福音主義の信仰を建学の精神に据える大学として、大学のキャンパス・ミニストリーを担う教員（チャプレン）たちにより、1977 年以来、年に一度、東京か仙台を会場に、様々な主題のもとで一泊二日の合同協議会を開催してきた。この協議会によって論ぜられ、得られた成果はそれぞれの大学の働きに生かされ、用いられてきた。今回、諸般の事情により、規模を縮小して両校の交流を続けることを双方合意のもとに決定し、合同チャプレン会はしばらく休会することとした。再開できる日を願いつつ、これまでの主題をすべて青山学院大学宗教部長の伊藤悟先生が報告され、続いて東北学院大学側として私（野村）が補足した。以下に掲載し、記録として保存しておく。

第 38 回 青山学院大学・東北学院大学合同チャプレン会議プログラム

日 時 2015 年 9 月 22 日 (火)

13:00 ~ 19:00

会 場 仙台国際ホテル 6 階

総合司会 東北学院大学 原田 浩司

主題「合同チャプレン会議の歴史と意義」

- 13:00 開会礼拝
担当 東北学院大学 吉田 新
- 13:25 発題Ⅰ (45分)
「合同チャプレン会が積み上げてきたもの」
司会 東北学院大学 原田 浩司
発題 青山学院大学 伊藤 悟
- [休 憩 (5分)]
- 14:15 発題Ⅱ (45分)
「合同チャプレン会とこれからの歩み」
司会 青山学院大学 福嶋 裕子
発題 東北学院大学 野村 信
- 15:00 コーヒーブレイク (10分)
- 15:10 全体協議 (1 時間 15 分)
司会 東北学院大学 出村みや子
- [休 憩 (5分)]
- 16:30 閉会礼拝
担当 青山学院大学 シュー土戸 ポール
- 17:00 学長招待レセプション
司会・祈祷 東北学院大学 野村 信
- 19:00 終了

東北学院大学・青山学院大学 合同チャプレン会議 主題一覧（第1～38回）

【合同チャプレン会議開催の趣旨】

東北学院大学と青山学院大学とは、キリスト教信仰を建学の精神の中心においています。それを教育と研究の場としての大学においてどのように展開するか、それは、クリスチャン・スクールとしての両大学にとって重大な問題です。そこで、1977年、キャンパス・ミニストリーに直接責任を負っているものたち（チャプレンとよぶ）が集まり、志を同じくする者としての交わりを暖めるとともに、キリスト教大学の理念、目的、方法、実行等について情報や意見を交換し、相互に啓発され、さらに共通の課題について研鑽をするために年1回の「合同チャプレン会議」を開くことを申し合わせました。なお、そのとき将来は両大学だけではなく、われわれの目的に賛同する他大学のチャプレンの参加をも得て、さらに研修の場を広げたいとの願いをもっていました。

回	年度	開催日	主題 発題タイトル（発題者）	開催場所	出席数（職員数）		報告書
					東北学院	青山学院	
0	1977	1977/11/2	予備打合せ（キリスト教学校教育同盟代表者協議会の日）				無
2	1978	1978/7/19-20	キャンパス・ミニストリーの諸問題 「青山学院大学キャンパス・ミニストリーの諸問題」 「東北学院大学キャンパス・ミニストリーの諸問題」	仙松閣 （宮城県松島町）			無
3	1979	1979/7/17	東北学院大学と青山学院大学とが宗教活動に於いて如何にして協力出来るか 「東北学院大学と青山学院大学とが宗教活動に於いて如何にして協力出来るか」（佐々木蔵之助） 「チャプレン会に今後どのように関わっていくか」（小笠原政敏、土戸清）	青山学院 ウェスレーホール	6	5	無
4	1980	1980/7/11-12	学生の宗教意識とキャンパス・ミニストリー 「学生の宗教意識とキャンパス・ミニストリー」（佐々木蔵之助） 「東北学院大学キャンパス・ミニストリーの現状と課題」（小笠原政敏）	仙松閣 （宮城県松島町）			無
5	1981	1981/7/10-11	キャンパス・ミニストリーについて 「キャンパス・ミニストリーについて」（佐々木蔵之助） 「東北学院・青山学院についての報告・展望」（土戸 清、伊藤久男） 「チャプレン会の今後について」（倉松 功、高橋道雄）	青山学院 ウェスレーホール	7	6	無
6	1982	1982/7/9-10	キャンパス・ミニストリーにおけるキリスト教の位置づけ 「キャンパス・ミニストリーにおけるキリスト教の位置づけ」（小笠原政敏） 「複数キャンパスに於けるミニストリー」（佐々木蔵之助） 「合同チャプレン会議、今後の課題」（雨貝行應）	那須白雲荘			無
7	1983	1983/7/8-9	キャンパス・ミニストリーに於ける大学礼拝の位置 「キャンパス・ミニストリーに於ける大学礼拝の位置」（雨貝行應、高橋道雄） 特別レポート「諸大学の礼拝実態」（土戸 清）	イーグルス会館 （箱根町）	8	5(+2)	1号
8	1984	1984/7/5-6	キャンパス・ミニストリーに於ける大学礼拝の位置 「総合大学における神学」（東方敬信） 「キリスト教学校の礼拝」（倉松 功） 特別レポート「東北学院大学の礼拝出席状況」（佐々木勝彦）	岩沼屋ホテル （秋保温泉）	9	5	2号
9	1985	1985/7/12-13	キリスト教大学における証しの共同体の形成 「キリスト教大学における『礼拝』をめぐって考えること」（雨貝行應） 「キリスト教大学の状況と課題」（東方敬信） 特別レポート「厚木キャンパス開学後の青山学院大学キリスト教活動」（佐藤、深町、伊藤）	青山学院 ウェスレーホール	7	6(+1)	3号
10	1986	1986/7/10-11	キャンパス・ミニストリーの神学 「キャンパス・ミニストリーの神学」（佐々木蔵之助） キャンパス・ミニストリー・レポート（佐藤元洋、佐々木勝彦）	岩沼屋ホテル （秋保温泉）	7(+2)	6	4号
11	1987	1987/7/10-11	キリスト教大学の宣教とキリスト教 「キリスト教大学の教育と伝道」（雨貝行應） 「キリスト教大学における教育と伝道」（廣瀬久允） 特別報告「キリスト教文化研究所」（東方敬信）	東京ガーデンパレス	6(+2)	6	5号
12	1988	1988/7/8-9	キリスト教大学の宣教とその課題 「キリスト教大学における宣教とその展開」（東方敬信） 「複数キャンパスミニストリーの現状と課題」（西間木一衛）	仙台ガーデンパレス			6号
13	1989	1989/7/7-8	学生伝道のヴィジョン 「学生伝道のヴィジョン」（関川泰寛） 「学生伝道のヴィジョン」（深町正信）	麻布グリーン会館	10	6(+2)	7号
14	1990	1990/7/13-14	キリスト教学校 変わるもの変わらないもの 「キリスト教学校 変わるもの変わらないもの——福音の伝達——」（高橋道雄） 「キリスト教学校 変わるもの変わらないもの」（雨貝行應）	秋保リゾート ホテルクレセント	11 (+2)	5	8号
15	1991	1994/7/12-13	キリスト教大学の見直し 「キリスト教の実践と課題」（永井義之） 「キリスト教大学における学問性と伝道性」（山岡 健）	青山学院大学 総研ビル第15会議室	9	7(+2)	9号
16	1992	1992/7/10-11	キリスト教関係者推薦入学について 「キリスト教関係者推薦の理念と現実」（佐々木勝彦） 「青山学院大学におけるキリスト者推薦入試について」（佐藤元洋）	東北学院同窓会館			10号
17	1993	1993/7/9-10	大学改革とキリスト教 「大綱化をめぐって～青山学院大学の場合～」（佐藤元洋） 「東北学院大学におけるキリスト教再編成の課題」（関川泰寛）	青山学院大学 総研ビル第16会議室	9	9(+2)	11号
18	1994	1994/7/8-9	キリスト教大学の将来像について 「キリスト教大学の将来像～キャンパス・ミニストリーに於いて～」（関川泰寛） 「キリスト教大学の未来～その希望と不安～」（伊藤久男）				12号

回	年度	開催日	主題 発題タイトル(発題者)	開催場所	出席数(職員数)		報告書
					東北学院	青山学院	
19	1995	1995/7/7-8	キリスト教大学のアイデンティティー—現代の宗教的状况の中で— 「現代の宗教的状况とキリスト教の使信の現代的展開」(関田寛雄) 「プロテスタント・キリスト教主義学校の原型—ジュネーブ学院に学ぶ—」(野村 信)	青山学院大学 総研ビル第12会議室	9	10 (+1)	13号
20	1996	1996/7/12-13	キリスト教大学のアイデンティティ 「キリスト教大学のアイデンティティ」(土戸 清) 「多元的社会とキリスト教大学—旧約正典成立史の視点から—」(大島 力)	ホテルクレセント			14号
21	1997	1997/7/11-12	チャレンジャーの確立をめぐる—大学行政と学生伝道のコンテキストの中で— 「キリスト教概論の課題と展望」(大庭昭博) 「東北学院大学のチャレンジャー確立をめぐる」(佐々木哲夫)	青山学院大学 総研ビル第17会議室	8(+1)	9(+2)	15号
22	1998	1998/7/10-11	大学におけるキリスト教関連科目の意味 「キリスト教関連科目の弁証学的課題」(西谷幸介) 「大学におけるキリスト教教育」(東方敬信)	秋保リゾート ホテルクレセント	10 (+2)	6(+1)	16号
23	1999	1999/7/9-10	チャレンジャーの確立をめぐる—チャペルトーク— 「教会とキリスト教大学の伝道協力のために」(嶋田順好) 「大学礼拝のよりよい説教のために」(佐藤司郎)	青山学院大学 総研ビル第15会議室	9(+2)	8(+2)	17号
24	2000	2000/7/14-15	キリスト教大学の使命 「大学における宣教の課題と役割」(永井義之) 「大学における宣教—キリスト教概論の目指すもの—」(大島 力)	秋保リゾート ホテルクレセント	8(+2)	6(+2)	18号
25	2001	2001/7/13-14	キリスト教概論・キリスト教の目指すもの—具体的な事例を手掛かりとして— 「キリスト教概論の目指すもの」(森本あかり) 「キリスト教の目指すもの」(雨貝行磨)	青山学院大学 総研ビル第12会議室	8(+2)	9(+3)	19号
26	2002	2002/7/18-19	キリスト教大学とITの利用—情報機器による教育とミニストリーの可能性— 「ITの具体的な利用方法とキリスト教大学」(野村 信) 「IT時代のキャンパス・ミニストリー」(伊藤 悟)	東北学院大学 第3会議室	8(+5)	5(+2)	20号
27	2003	2003/7/18-19	キリスト教大学における学際教育と研究 「地球市民教育としてのキリスト教教育—学際的アプローチの一例として—」(原口尚彰) 「キリスト教大学における学際的研究と教育の可能性—『科学と宗教』という領域を越えて—」(大島 力)	青山学院大学 相模原キャンパス 青山キャンパス			21号
28	2004	2004/7/16-17	日本の大学の神学 「学問論の復権を目指して」(西谷幸介) 「日本の大学の神学—キリスト教倫理の角度から—」(東方敬信)	東北学院大学 第3会議室	10 (+3)	7(+2)	22号
29	2005	2005/7/15-16	キリスト教教育とe-ラーニング 「大学におけるe-ラーニングの効果的な進め方」(玉木欽也) 「ケーススタディ: キリスト教教育のためのe-ラーニング」(シュエ土戸ポール)	青山学院大学 総研ビル第15会議室	7(+2)	8(+2)	以後 作成 せず
30	2006	2006/7/21-22	回顧と展望 「回顧と展望~チャレンジャーの視点から~」(東方敬信) 「回顧と展望~開設時の意義と将来の展望」(佐々木哲夫、北 博)	東北学院大学 第3会議室	6(+2)	10(+2)	
31	2007	2007/7/20-21	大学と教会 「大学と教会の有機的關係~青山学院の場合~」(伊藤 悟) 「大学の中のキリスト者」(村上みか)	青山学院大学 総研ビル第15会議室	7(+2)	7(+2)	
32	2008	2008/7/18-19	キリスト教の内容と方法 「キリスト教概論等の内容と方法」(嶋田順好) 「キリスト教を考える」(佐々木勝彦)	東北学院大学 第3会議室	10(+2)	9(+2)	
33	2009	2009/7/24-25	大学礼拝について~新しい礼拝への模索~ 「青山学院大学の夕礼拝」(シュエ土戸ポール) 「東北学院大学礼拝の現状と展望」(出村みや子)	青山学院大学 総研ビル第15会議室	8(+2)	12(+2)	
34	2010	2010/7/17-18	建学の理念と大学のミニストリー 「日本におけるキリスト教大学の使命」(東方敬信) 「大学礼拝の充実を 目指して(未来に向かって)」(野村 信)	東北学院大学 第3会議室	9(+4)	10(+1)	
	2011		<中止> 東日本大震災の影響による				
35	2012	2012/7/28-29	東日本大震災をめぐる 「3.11後の世界に生きる: 被災地にあるキリスト教大学の課題」(原口尚彰) 「3.11以後のキリスト教大学」(伊藤 悟)	青山学院大学 総研ビル第15会議室	8(+2)	11(+2)	
36	2013	2013/9/15-16	キリスト教学校の今日の課題 「これからの『大学宗教主任』の話をしよう」(原田浩司) 「核代におけるヨハネ黙示録の問い」(福嶋裕子)	東北学院大学 第1会議室	8(+4)	9(+2)	
37	2014	2014/9/15	大学礼拝の神学的理解 「大学礼拝の神学的位置づけ」(野村 信、出村みや子) 「会衆席の神学」(塩谷直也)	青山学院間島記念館 大集会室	8(+4)	9(+2)	
38	2015	2015/9/22	合同チャレン会議の歴史と意義 「合同チャレン会議が積み上げてきたもの~折がよくても悪くても~」(伊藤 悟) 「合同チャレン会議の足跡を振り返り、今後の歩みについて」(野村 信)	仙台国際ホテル	6(+4)	11(+1)	

※資料提供: 青山学院大学宗教部長 伊藤悟先生

第 38 回合同チャプレン会発題Ⅱ（レジュメ）

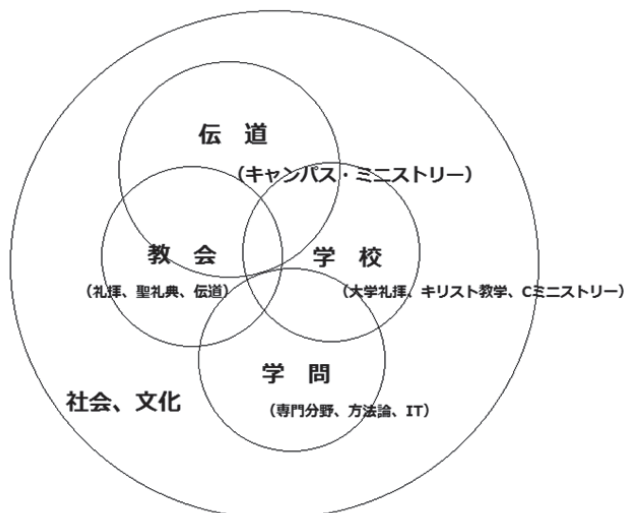
東北学院大学 宗教部長 野村 信

1、共通の福音信仰を土台とした両校の宗教活動の歴史の意義と価値

青山学院大学と東北学院大学は、同じ福音主義のキリスト教信仰を建学の精神とする大学として、創立以来一貫して、聖書に基づくキリスト教教育を行ってきた。特にその具体的な現れとして、大学礼拝を重んじ、キリスト教を必修とし、さらに学生のためのキャンパス・ミニストリーを実行してきた。38 年前から、合同チャプレン会を開始したが、両校の熱心な取り組みと互いから学ぶ研鑽は貴重なものであった。この意義は高く評価したい。

2、『合同チャプレン会議報告書』（第 1 号、1983 年～第 22 号、2003 年）を振り返る。

今までの報告書から明らかになる合同チャプレン会の主題は、以下のように図示することができる。



3、東北学院大学の向こう 20 年(創立 150 周年、2036 年)、TG Grand Vision 150

東北学院は、1868 年に創設されて、今年が 130 年目にあたり、2036 年には 150 年を迎える。そこで、今年の 130 年を記念として、これからの 20 年に向かって、TG Grand Vision 150 が策定され、様々な事業を展開していくことを決定した。大学だけではなく学院全体で各部署がそれぞれ具体的な目標を定めて、その達成のために 5 年毎に中期計画を立て、さらに毎年検証を進めていく。

その全体像は、次のような右図で作成された。すなわち、ミッションという土台には、建学の精神が据えられ、ここを根として成長していく木のイメージである、これは、キリストが語られた神の国のたとえを思い起させる(マタイ 13:31-32)。その幹と枝が内容であり、実りの部分でもある。そして先端は、目標であり、これは「ゆたかに学び 地域へ 世界へ 一よく生きる心が育つ東北学院」というメインビジョンが位置する。



どの部署も基本構想の構成要素である次の五つの領域、すなわち、＜教育研究＞、＜社会貢献＞、＜教育環境＞、＜組織運営＞、＜学生・生徒簿募集、広報＞について、それぞれに目標を立案し、それに向かって歩みを進めていく。私たち宗教部も 5 年間の中期計画と単年度の計画を作成した。＜教育研究＞の領域では、「大学礼拝」と「キャンパス・ミニストリー」の充実を掲げ、特に年間のべ 12 万 8 千人の学生の出席を増やす努力を続ける。＜社会貢献＞においては、公開講演、公開講座など、音楽関係や宗教部主催の行事をより豊かに推し進めていく。＜教育環境＞においては、まだ未設置のキリスト者等推薦学生の集まりのできる集会室や学生図書を整備を進めていく。＜組織運営＞においては、現在ある宗教関係の各会議や活動をより活発に行う。＜学生・生徒簿募集、広報＞については、ホーム・ページの充実を図りたい。このような目標に向かってこれから前進していきたいと考えている。

4、東北学院大学の宗教活動のこれから

現在、宗教部のスタッフ、すなわち総合人文学科の教員がかなり不足している。これから新規採用を行い、充実した陣容にしたいと願っている。振り返れば、10 数年前には、青山学院大学よりも東北学院大学の宗教関係の教員がかなり多くいた時期もあったが、現在は、青山学院大学の充実ぶりに先を越されている感がある。しかし、こうして互いに協議し、学び、また刺激を受けて活動して来ることができたことはまことに幸いである。東北学院大学は、この状況下でも、大学礼拝も宗教活動が順調に進んでいるので、これから新メンバーを加え

てさらに宗教活動を充実させたいと願っている。

5、最後に、5年に一度位の合同チャプレン会を開催希望

両校の多忙と日時設定の難しさから、これからしばらく合同チャプレン会は休会となるが、2、3人の代表者間の交流は続けていきたいので、いずれ再開の日を心から期待したい。

(了)

(※なお本レジュメは、今回の報告のために当日の配布資料に多少加筆して作成した。)

2015 年度（平成 27 年度）
東北学院大学宗教活動報告

2015（平成 27）年度東北学院大学宗教活動報告

◇教員組織

宗教部長	野村 信
書記	原田浩司
土樋担当	野村 信
多賀城担当	吉田 新
泉担当	原田浩司
キリスト教文化研究所所長	出村みや子
総合人文学科長	出村みや子
（北博大学宗教主任、今井奈緒子大学オルガニスト 研修休暇）	

◇大学礼拝

月～土曜日	10時25分～10時45分（土樋朝、多賀城、泉）
水曜日	19時35分～19時55分（土樋夜）
月曜日	19時30分～20時00分（泉女子寄宿舍）
火曜日	19時30分～20時00分（泉寄宿舍、旭ヶ岡寄宿舍）

年間総出席者数

キャンパス	2015年度			2014年度			2013年度		
	総数	回数	平均	総数	回数	平均	総数	回数	平均
土樋(朝)	18,285	181	101	17,033	180	95	13,162	181	73
多賀城	34,784	181	192	39,514	178	222	31,548	181	174
泉	73,112	181	404	67,264	180	374	53,489	181	296
土樋(夜)	820	32	26	1,147	33	35	1,321	34	39
総数	127,001	575	221	124,958	571	219	99,520	577	172

〔備考〕・春季・秋季特別伝道礼拝、大学クリスマス礼拝を含む。

・平均値の小数点は四捨五入。

総回数 661回〔3キャンパス（575回）・寄宿舍（86回）〕

－ 礼拝司会者内訳 －

学外（牧師） 373回

学内 288回

—学内者内訳—

院長、学長、キリスト者教員、学生など	70回
宗教部関係者	218回

—宗教部関係者内訳—

宗教部長	34回
原田浩司大学宗教主任	34回
吉田新大学宗教主任	39回
出村みや子総合人文学科長	30回
佐々木勝彦先生	28回
佐藤司郎先生	25回
マーチー デイビッド先生	28回

◇春季宗教教育強調週間特別伝道礼拝

日時・場所	2015年5月12日(火) 10時10分～11時00分	泉キャンパス
説教者	寺田信一牧師(日本基督教団横須賀小川町教会)	<u>1,425名出席</u>
説教題	「わたしがそうなのです」	
聖書箇所	ヨハネによる福音書 第9章1～12節	

日時・場所	2015年5月13日(水) 10時10分～11時00分	土樋キャンパス(朝)
説教者	寺田信一牧師(日本基督教団横須賀小川町教会)	<u>300名出席</u>
説教題	「わたしがそうなのです」	
聖書箇所	ヨハネによる福音書 第9章1～12節	

日時・場所	2015年5月13日(水) 19時35分～20時25分	土樋キャンパス(夜)
説教者	馬場康夫牧師(日本基督教団小田原十字町教会)	<u>36名出席</u>
説教題	「いのちとひかりを与える神の愛」	
聖書箇所	ヨハネによる福音書 第10章1～21節	

日時・場所	2015年5月13日(水) 10時10分～11時00分	多賀城キャンパス
説教者	馬場康夫牧師(日本基督教団小田原十字町教会)	<u>663名出席</u>
説教題	「いのちとひかりを与える神の愛」	
聖書箇所	ヨハネによる福音書 第10章1～21節	

◇秋季宗教教育強調週間特別伝道礼拝

日時・場所	2015年10月7日(水) 10時10分～11時00分	多賀城キャンパス
説教者	澤谷常清氏(学校法人カナン学園三愛学舎前校長)	<u>372名出席</u>

説教題 「神のなさる業」—自分を振り返るようになったあけみさん—
聖書箇所 コヘレトの言葉 3章 1節、11節

日時・場所 2015年10月7日(水) 10時10分～11時00分 泉キャンパス
説教者 坪井節子氏(社会福祉法人カリヨン子どもセンター理事長) 928名出席
説教題 「ひとりぼっちじゃないんだよ」
聖書箇所 マタイによる福音書 28章 16節～20節

日時・場所 2015年10月7日(水) 19時35分～20時25分 土樋キャンパス(夜)
説教者 坪井節子氏(社会福祉法人カリヨン子どもセンター理事長) 39名出席
説教題 「ひとりぼっちじゃないんだよ」
聖書箇所 マタイによる福音書 28章 16節～20節

日時・場所 2015年10月8日(木) 10時10分～11時00分 土樋キャンパス(朝)
説教者 澤谷常清氏(学校法人カナン学園三愛学舎前校長) 162名出席
説教題 「神の愛とは？」—ひとし君の優しさ—
聖書箇所 コリントの信徒への手紙一 13章 4節～7節

◇第27回泉キャンパスクリスマス

日時 2015年12月4日(金) 18時30分より 310名出席
場所 泉キャンパス礼拝堂
説教者 中本純牧師(日本基督教団仙台東六番丁教会)
説教題 「さいしょのクリスマス」

◇大学クリスマス

日時・場所 12月17日(木) 10時25分 泉キャンパス礼拝堂 654名出席
12月17日(木) 16時30分 ラーハウザー記念東北学院礼拝堂 162名出席
12月18日(金) 10時25分 多賀城キャンパス礼拝堂 339名出席
説教者 小泉 健先生(東京神学大学准教授)
説教題① 「ワンダフル・カウンセラー」(泉キャンパス)
聖書① イザヤ書 第9章 1節～6節
説教題② 「神に栄光、人に平和」(土樋、多賀城キャンパス)
聖書② ルカによる福音書 第2章 1節～14節
独唱・演奏 ヘンデル「メサイア」より抜粋(独唱)
クリスマスメドレーほか(マリンバ、オルガン)
オルガン 小野なおみ(礼拝オルガニスト)
独唱者 熊木晟二(声楽家・バス)、鈴木美紀子(声楽家・ソプラノ)

マリンバ 総合人文学科3年 佐藤由子

◇第20回スプリング・カレッジ

日 時 2015年4月11日(土) 14:30～18:00
場 所 泉キャンパス礼拝堂(1階) 小礼拝堂、会議室
内 容 キリスト者等推薦入学生へのガイダンス
開会礼拝 吉田新大学宗教主任
挨 拶 野村信宗教部長
ガイダンス キリスト者等推薦学生の心得・義務の説明 原田浩司大学宗教主任
1) 年間宗教行事への参加について
2) 大学礼拝への出席について
3) 聖書研究会か聖歌隊のいずれかへの加入について
4) 出席教会の確定と報告について
5) その他(カルト宗教に関する注意など)
参 加 学生25名、教職員6名(野村宗教部長、原田、吉田、坂本、渡辺、菅野)

◇第41回サマー・カレッジ

日 時 2015年8月3日(月)～8月5日(水)
場 所 宮城蔵王ロイヤルホテル
主 題 「パウロと共に歩む～古代から現代へ～」(公開講演:押川ホール)
講 師 松本宣郎学長
吉田新大学宗教主任
参 加 学生20名 教職員6名(野村宗教部長、原田、吉田、森谷、菅野、佐藤)

◇第60回教職員修養会

日 時 2015年9月3日(木)～9月4日(金)
場 所 宮城蔵王ロイヤルホテル
主 題 「聖書に聴く」
講 師 前東京神学大学学長 近藤勝彦先生
参 加 113名(教育職員57名、事務職員56名)

◇キリスト者等推薦入学生との懇談会

日 時 2015年7月8日(水) 泉キャンパス 学生15名、教職員5名出席
2015年12月8日(火) 泉キャンパス 学生21名、教職員5名出席

◇礼拝奉仕者懇談会(事務職員)

土 樋キャンパス 2015年6月18日(木) 11時～11時20分

参加者 松本学長、佐々木院長、野村宗教部長、齋藤総務部長、
渡邊総務課長 他 23 名

多賀城キャンパス 2015 年 6 月 2 日 (火) 11 時～ 11 時 20 分

参加者 松本学長、中沢工学部長、吉田大学宗教主任、
小松総務部次長 他 23 名

泉 キャンパス 2015 年 6 月 8 日 (月) 14 時 30 分～ 15 時 10 分

参加者 原田浩司大学宗教主任、二階堂総務部次長 他 13 名

◇礼拝オルガニスト懇談会

日 時 2016 年 2 月 22 日 (月) 11 時～ 13 時

場 所 土樋キャンパス本館会議室

参 加 29 名 (礼拝オルガニスト他)

◇礼拝司会者 (牧師・宣教師) 懇談会

日 時 2016 年 2 月 22 日 (月) 18 時 30 分～ 20 時 30 分

場 所 仙台国際ホテル

参 加 35 名 (牧師・宣教師他)

◇宗教部会

開 催 日 2015 年 4 月 9 日 (木)、5 月 7 日 (木)、6 月 4 日 (木)、7 月 16 日 (木)、
9 月 24 日 (木)、10 月 29 日 (木)、11 月 19 日 (木)、
2016 年 1 月 14 日 (木)、2 月 22 日 (月) 計 9 回

◇大学宗教主任会

開 催 日 2015 年 4 月 9 日 (木)、9 月 24 日 (木)、10 月 29 日 (木)、
2016 年 1 月 28 日 (木)、2 月 25 日 (木) 計 5 回

◇事務打合せ

日 時 2015 年 11 月 19 日 (木) 14 時 30 分～ 15 時 30 分

議 題 「2015 年度補正予算及び 2016 年度予算案について」

場 所 土樋キャンパス本館会議室

参 加 宗教部長、大学宗教主任、各キャンパス事務担当者

◇宗教部自己点検評価委員会

①第 1 回

日 時 2015 年 10 月 1 日 (木) 14 時 30 分～ 14 時 55 分 8 号館第 1 会議室

主 題 「2015 年度 (前期) 宗教活動について」

「2015年度（後期）宗教活動予定について」

②第2回

日 時 2016年2月25日（木）13時～14時 本館会議室

主 題 「2015年度東北学院大学宗教活動報告について」

「2016年度東北学院大学宗教活動予定について」

◇第38回青山学院大学合同チャプレン会議（仙台会場）

日 時 2015年9月22日（火）13時～19時

場 所 仙台国際ホテル

主 題 「合同チャプレン会議の歴史と意義」

発 題 者 発題Ⅰ 伊藤悟先生（青山学院大学）

発題Ⅱ 野村信先生（東北学院大学）

参 加 22名

◇宗教部研修会（キリスト教学FD研修会合同開催）

日 時 2015年7月16日（木）17時～19時30分

場 所 東北学院サテライトステーション会議室

発 題 「キリスト教学の講義の充実を目指して」

発題者 出村みや子総合人文学科長

発題者 野村信宗教部長

参 加 8名

◇第20回キリスト者教員研修会

日 時 2016年1月15日（金）14時～19時30分

場 所 仙台国際ホテル

主 題 「学内キリスト教活動の活性化」

発 題 者 野村信宗教部長

参 加 教育職員7名、事務職員2名

◇宗教委員会

日 時 2016年3月9日（水）17時

場 所 土樋キャンパス 8号館第1会議室

◇学長招待卒業生懇談会

日 時 2016年3月10日（木）12時～13時

場 所 土樋キャンパス 8号館第1会議室

参 加 松本学長、宗教部長、大学宗教主任、総務課職員、卒業予定者 13 名

◇聖書研究会

土樋 キャンパス	出村みや子	大学宗教主任	「ルターの知的遺産」
	佐藤 司郎	文学部	「聖書と現代」
	野村 信	宗教部長	「ギリシャ語聖書読書会」
多賀城キャンパス	長島 慎二	工学部	「聖書日課を読む」
泉 キャンパス	野村 信	宗教部長	「み言葉を喜び、歌う」
	原田 浩司	大学宗教主任	「キリスト教の信仰の基礎」
	吉田 新	大学宗教主任	「聖書に学ぶ生きるヒント」

◇宗教部聖歌隊

音楽礼拝、公開クリスマス等への奉仕活動

◇『大学礼拝』

132号「新入生歓迎号」、133号「秋号」、134号「クリスマス特集号」

◇『2015 キリスト教活動のハンドブック』

2015年4月1日発行

◇『礼拝説教集』

第20号（2016年3月31日発行）

◇『宗教活動報告書』

第16号（2015年8月31日発行）

◇その他

礼拝堂管理、図書資料受入、調査回答

◇卒業記念礼拝

日 時 2016年3月24日（木）11時

説教者 野村 信宗教部長

説教題 「地の塩、世の光」

東北学院大学教職員修養会 キリスト者教員研修会報告書

第 17 号 2016 年 8 月 31 日発行

発行責任者 宗教部長 野村 信
編集責任者 宗教部長 野村 信
出 版 社 株式会社アクトジャパン
問い合わせ先 東北学院大学総務課
〒 980-8511 仙台市青葉区土樋 1 の 3 の 1
電話 022 - 264 - 6428

